

河野から酒井へ申込んだ、其の縁談の事の為では無いが、同じ此の十二日の夜、道學者坂田禮之進は、渠が、主なる發企者で且つ幹事である處の、男女交際會——又の名、家族懇話會——委しく註するまでもない、其の向の夫婦が幾組か、一處に相會して、飲んだり、食つたり、饒舌つたり……と云ふと尾籠になる。紳士貴婦人が互に相親睦する集會で、談政治に渉ることは少ないが、宗教、文學、美術、演劇、音樂の品定めが其處で成立つ。現代に於ける思潮の淵源、天堂と食堂を兼備へて、薔薇薫じ星の輝く美的の會合、とあつて、おしめと襷を念頭に置かない催しであるから、留守では、芋が焦げて、小兒が泣く。町内迷惑な……其の、男女交際會の軍用金。諸處から取集めた百有餘圓を、馴染の會席へ支拂ひの用があつて、夜、モオニングを着て、扨て電燈の明い電車に乗つた。

（アバ大人ですか、ハヽヽ今日の午後。）と酒井先生方の書生が主税に告げたのと、案ずるに同日であるから、其の編上靴は、一日に市中の何うのくらゐに足跡を印するか料られぬ。御苦勞千萬と謂はねばならぬ。

先哲曰く、時は黄金である。そんな隙潰しをしないで、交際會の會費なら、其場で請取つて直ぐに拂ひを済したら好さうなものだが、一先づ手許へ引取つて、更めて夫子自身を勞するのは？知らずや、此の勘定の時は、席料無しに、其處の何とか云ふ姉さんに、茶の給仕をさせて無錢で手を握るのだ、と云つたものがある。世には演劇の見物の幹事をして、其を縁に、俳優と接吻する貴婦人もあると云ふから、尤も是は、嘘であらう。が、會費を衣兜にして、電車に乗つたのは事實である。

「えヽ、込合ひますから御注意を願ひます。」
禮之進は提革に拵りながら、人と、車の動搖の都度、成るべく操りのポンチたらざる態度を保つて、而して、乗合の、肩、頬、耳などの透間から、痘痕

を散らして、目を配つて、鬢、簪、庇、目つきの色々を、膳の上の箸休めの氣で、ちびり／＼と獨酌の格。あゝ、江戸兒は此の味を知るまい、と乗合の婦の移香を、樂み然うに、齒をスーと遣つて、片手で頤を撫でゝ居たが、車掌の其の御注意に、其と心付くと、俄然として、慄然として、膚寒うして、腰が軽い。途端に引込めた、年紀の若い半纏着の手ツ首を、即座の冷汗と取つて置ききの膏汗で、ぬらめいた手で、夢中に確乎と引搦んだ。

道學先生の徳孤ならず、隣りに掏摸が居た然うな。

「・・・・・・・・」

と、わなゝいて、氣が上づゝて、唯睨む。

對手は手拭も被らない職人體のが、ギツクリ、髪の毛の揺れるほど、頭を下げて、

「御免なすつて、」と盗むやうに哀憐を乞う目づかひをする。

「出、出しをらう、」

と震へ聲で、

「馬鹿！」

と一つ極めつけた。

「何うぞ、御免なすつて、眞平、へい・・・・」

と革かはに縋すがつたまゝ、ぐつたりと成なつて、悄しよげ氣返かへつた職しよく人の状さまは、消きえも入いりたいとよりは、宛さな然がら罪つみを恥はぢて、自じ分ぶんで縋くびくつたやうである。

「コリヤ」と又また怒ど鳴なつて、満まん面めんの痘あばた痕なを蠢うごかして、堪こらへず、握にぎり拳こぶしを擧あげて其その横よこ頬づらを、ハタと撲ぶつた。

「あ、痛いた、」

と横よこに身みを反そらして、泣なき聲こゑに成なつて、

「酷ひど、酷ひどうござんすね．．．．旦だん那な、ア痛いた々々、」
最も一ひとつ拳こぶしで、勝かち誇ほこつて、

「酷ひどいも何なにも要いつたものか。」

哄どつと立たち上あがる多た人にん數ずの影かげで、月つきの前まへを黒くろ雲くもが走はしるやうな電でん車しゃの中なか。大だい事じに革かは靴ばんを抱だきながら、車しゃ掌しやうが甲かん

走はしつた早はや口くちで、

「御ご免めんなさい、何なんですか、何なんですか。」

カラアの純白な、髪をきちんと分けた紳士が、職人體の半纏着を引捉へて、出せ、出せ、と喚いて居るからには、其間の消息一目して瞭然たりで、車掌も些とも猶豫はず、無手と曲者の肩を握つた。

「降りろーさあ、」

と一ツしやくり附けると、革を離して、蹠跟と凭れかゝる。半纏着に又凭れ懸かるやうになつて、三人揉重なつて、車掌臺へ壓されて出ると、先から、がらりと扉を開けて、把手に手を置きながら、中を覗込んでいた運転手が、チリン無しに丁ど其處の停留所に車を留めた。

御嶽山を少し進んだ一ツ橋通を右に見る邊りで、此街鐵は、是から御承知の如く東明館前を通つて兩國へ行くのである。

「少々お待ちを・・・」

と車掌も大事件の肩を掴まへて居るから、息急いで、四五人押込まうとする待合はせの乗組を制しな

がら、後退りに身を反らせて、曲者を釣身に出ると、
両手を突張つて禮之進も續いて、どたり。

後からぞろ／＼七八人、我勝ちに見物に飛出たの
がある。事ありと見て、乗ろうとしたのも其のまゝ
足を留めて、押取巻いた。二人ばかり婦も交つて。

外へ、其の人数を吐出したので、風が透いて、す
つきり透明に成つて、行儀よく乗合の膝だけは揃ひ
ながら、思ひ／＼に捻向いて、硝子戸から覗く中に、
片足膝の上へ投げて、丁子巴の羽織の袖を組合はせ
て、茶の其の中折を額深く、ふら／＼坐眠りをして
居たらしい人物は、酒井俊藏であつた。

けれども、禮之進が今、外へ出たと見ると同時に、
明かに其の兩眼を二いた瞳には、一點も睡さうな曇
が無い。

惟ふに、乗合ひの蔭ではあつたが、禮之進に目を
着けられて、例の（益々御翻譯で。）を前置きに、
（就きましては御縁女儀、）を場處柄も介はず辨じ
られやう恐がある爲、計略茲に出たのであらう。但
其の縁談を嫌つたと云ふ形跡は聊かも見當らぬが。

「攫られたのかい。」

「はい、」

唯見ると、酒井の向ひ合はせ、正面を右へ離れて、
丁ど其の曲者の立つた袖下の處に主税が居て、恚く
答へた。

「何でございますか、騒ぎです。」

先生の前で、立騒いでは、と控へたが、門生が澄
まし込んで冷淡に膝に手を置いて居るにも係はらず、
酒井はづゝと立つて、脊高く車掌臺へ出かけて、此
處にも立淀む一團の、彌次の上から、大路へ顔を出
した……時であつた。

主客顛倒、曲者の手がポカリと飛んで、禮之進の
痘痕は砕けた、火の出るやう。

「猿唐人め。」

あらう事か、あつと頬げたを壓へて退る、道學者
の襟飾へ、斜かひに肩を突懸けて、横押にぐいと押
して、

「何だ、何だ、何だ、何だと？ 掏摸だ、盜賊だ

と……クソを啖え。ナニ其の、胡麻和のやう
な汝が面を甜めろい！ さあ、何處に私が汝の紙入を

掏つたんだ。

此方あ又、串戯ぢやねえ。込合つてる中だから、
汝の足でも踏んだんだらう、と思つてよ。足ぐれえ
踏んだにしちや、怒りやうが御大層だが、面を見や、
踵と大した違えは無えから、はゝは、

と夜の大路へ笑が響いて、

「汝の方ぢや、面を踏まれた分にして、怒りやが
るんだ、と斷念めてよ。難有く思へ、日傭取のお職
人様が月給取に謝罪つたんだ。

何時出来た規則だか知らねえが、股ツたア出すな
ツてえ、肥満つた乳母どんが焦ツたがりやしめえし、
厭味ツたらしい言分だが、其奴も承知で乗つてるか
らにや、他様の足を踏みや、引摺下される御法だ、
と往生してよ。」

と、車掌にひよこ頭を下げて、

「へいこら、と下りて遣りや、何だ、掏摸だ。掏
摸たア何でえ。」

又禮之進に突懸る。

三十四

「掬られた、盗られたツて、幾干ばかり臺所の小遣をごまかして來やあがつたか知らねえけれど、汝が其の面で、何うせなけなしの小遣だらう、落しつこはねえ。

へん、鈍漢。何の道、掬られたにや違えはねえが、汝が其の間抜けな風で、内から此處まで墓口が有るもんかい、疾くの昔にちよろまかされて居やあがつたんだ。

さあ、お目通りで、着物を引掉つて神田兒の膚合を見せてやらあ、汝が口説く婦ぢやねえから、見たつて目の潰れる憂慮はねえ、安心して切立の禪を拝みやあがれ。

えゝ恚う、念晴しを澄ました上ぢや、汝、何うするか見る。「やあ、風が變つた、風が變つた。」と酒井は快活に云つて、原の席に歸つた。

車掌臺からどや／＼と客が引込む、直ぐ後へー見張員に事情を通じて、事件を引渡したと思はれるー車掌が勢なく戻つて、がちやりと提革靴を一

つ揺つて、チンと遣つたが、未だ残惜さうに大路に半身を乗出して人だかりの混々揉むのを、通り過ぎ状に見て進む。

と錦帯橋の月の景色を、長谷川が道具で見せたやうに、づらりと繋つて停留して居た幾つとない電車は、大通りを廻り舞臺。事の起つた車内では、風説とり／＼。

彼は掏摸の術でございます。はじめに恐入つていた様子ぢや、確に業をしたに違ひませんが、最う電車を下りますまでには同類の袂へすつこかしにして、証拠が無いから逆捻じを遣るでございませう、と小商人風の一分別ありさうなのが其の同伴らしい前垂掛に云ふと、此方では法然天窓の隠居様が、七度捜して人を疑へぢや、滅多な事は謂はれんもので、なう。

然うおつしやれば、あの掏られた、と言ひなされる洋服を着た方も、をかした御仁でござりますよ。此娘の貴下、（と隣に腰かけた、孫らしい、豊肌した娘の膝を叩いて、）簪へ、貴下、立つていて一寸々々、手をお觸りなさるでございませう。御仁體が、御仁體なり、此の娘が恥かしがつて、お止しよ、お止し

よ、と申しますから、何をなさる、と口まで出ましたのを堪へていたのでござりますよ。お止しよ、お祖母さんと、其の娘は又同じことを爰で云つて、ばうと紅くなる。

法然天窓は苦笑いをして……後からせよるやら、前からは毛の生えた、大な足を突出すやら……など、浄瑠璃にもあつて、なう、昔、此の登り下りの乗合船では女子衆が怪しからず迷惑をしたものぢやが、電車の中でも遣りますか、なう、結局、掏摸よりは困りものぢやて。

駄目でさ、だつてお前さん、いきなり引摺り下ろして了つたんだから、それ、ばら／＼一緒に大勢が飛出しましたね、よしんばですね、同類が居た處で、疾の前、何處かへ、すつ飛んで居るんですから手係りはありやしません。然うで無くつて、一人も乗客が散らずに居りや、私達だつて關合ひは抜けませんや。巡査が来て、一應檢べるなんぞツて事に成りかねません。え、後は何うなるツて、お前さん、掏摸は現行犯ですからね、証拠が無くつて、知らな

いと云や、其までゞさ。又眞個に掬られたんだか何
だか知れたもんぢやありません、何うせ間抜けた奴
なんでさあね、と折革鞆を抱へ込んだ、何處かの中
小僧らしいのが、隣合つた田舎の親仁に、尻上りに
辨じたのである。

執道學先生の爲に、祝すべき事ではない。

敢て人の憂を見て喜ぶやうな男ではないが、然り
とて差當り如彼した中の禮之進の爲に、其の憂を憂
として悲むほどの君子でも無からう。悪くすると
（状を見る。）ぐらゐは云ふらしい主税が、風向き
の悪い大人の風説を、耳を澄まして聞き取りながら、
太く憂はしげな面色で。

實際鬱込んで居るのは何故歟。

忘れてはならぬ、差向ひに酒井先生が、何となく、
主税を睨むが如くにして居ることを。

鬱ぐも道理、然うして電車の動くまゝに身を任せ
ては居るものゝ、主税は果して何處へ連れらるゝの
か、雲に乗せられたやうな心持がするのである。

尤も、薬師の縁日で一所に成つて、水道橋から外
濠線に乗つた時は、仰せに因つて飯田町なる、自分
の住居へ供をして行つたのであるが、元來其の夜は、
露店の一喝と言ひ、途中の容子と言ひ、酒井の調子
が凜として厳しくつて、豫て恩威並び行はるゝ師の
君の、其の恩に預かれさうではなく、罰利生ある
親分の、其の罰の方が行はれさうな形勢は、言はず
ともの事であつたから、電車でも片隅へ蹙んで、僂
倖其處でも乗客が込んだ、人蔭に成つて、眩い大目
玉の光から、顔を躲はして免れていたは可いが、さ
て、神樂坂で下りて、見附の橋を、今夜に限つて、
高い處のやうに、危つかしく渡ると、件の賣卜者の
行燈が、眞黒な石垣の根に、狐火かと思えて、急に
土手の松風を聞く邊から、徐々足許が覺束なく成つ
て、心も暗く、吐胸を支いたのは、お鳶の儀。

偏に御目玉の可恐いのも、何を秘さう繻子の帯に

極つたのであるから、是より門口へかゝる・・・
敢て、のろけるにしもあらずだけれども、自分の音は、聞覚えて居る。

其の聲音が、他の聲音と共に、澄まして音信れゝば、（お歸んなさい。）で、出て来るは定のもの。分けて、お妙の事を、やきもき氣を揉んで居る處。其が為に恚うして出向いた、眞砂町の様子を聞き度さに、特に、似たもの夫婦の譬、信玄流の沈勇の方ではないから、随分翻然と露れ兼ねない。

いざ、露れた場合には・・・と主税は冷汗に成つて、胸が躍る。

生憎例のやうに話しもしないで、づか／＼酒井が歩行いたので、兎角う云ふ間もなかつた、早や我家の路地が。

堪り豫て、先生と、呼んで、女中が寝ていますと失禮ですから、一足！と云ふが疾いか、（お先へ、）は身體で出て、横ツ飛びに駈け抜ける内も、あゝ、我ながら拙い言分。

（待て！ 待て！）
其、聲が掛つた。
酒井は其處で足を留めた。

屹と立つて、

（宵から寐るやうな内へ、邪魔をするは氣の毒だ。他へ行かう、一緒に來な。）

で路が變つて、先生の爲るまゝ、鷲に攫はれたやうな思ひで乗つたのが、此の兩國行——

なか／＼道學者の風説に就いて、善惡ともに、自から思慮を回らすやうな餘裕とは無いのである。

電車が萬世橋の交叉點を素直ぐに貫いても、鷲は翼を納めぬので、さては此のまゝ隅田川へ流罪ものか、輕くて本所から東京の外へ追放になるうも知れぬ。

と觀念の眼を閉じて首垂れた。

「早瀬、」

「は、」

「降りるんだ。」

一場展開した廣小路は、二階の燈と、三階の燈と、店の燈と、街路の燈と、蒼に、萌黄に、紅に、寸隙なく鏤められた、綾の幕ぞと見る程に、八重に往來ふ人影に、忽ち寸々と引分けられ、さら／＼と風に連れて、鈴を入れた幾千の輝く鞠と成つて、八方に

投げ交はさるゝかと思はれる。

此處に一際夜の雲の濃やかに緑の色を重ねたのは、
隅田へ潮がさすのであらう、水の影か、星が閃く。

我が酒井と主税の姿は、此の廣小路の二點と成つ
て、淺草橋を渡果てると、富貴竈が巨人の如く、仁
丹が城の如く、相對して角を仕切つた、横町へ、斜
めに入つて、磨硝子の軒の燈籠の、媚かしく寂寞し
て、ちら／＼と雪の降るやうな數ある中を、蓑を着
た状して、忍びやかに行くのであつた。

やがて、貸切と書いた紙の白い、其の門の柱の暗
 い、敷石の二と明い、静肅としながら幽なやうに、
 三味線の音が、チラ／＼水の上を流れて聞える、一
 軒大構の料理店の前を通つて、三つ四つ軒燈籠の影
 に送られ、御神燈の灯に迎へられつゝ、地の濡れた、
 軒に艶ある、其横町の中程へ行くと、一條朧な露路
 がある。

藝妓家二軒の廂合で、透かすと、奥に薄墨で描い
 たやうな、竹垣が見えて、涼しい若葉の梅が一本、
 月はなけれど、風情を知らせ顔にすつきりとイむと、
 向ひ合つた板塀越に、青柳の忍び姿が、おくれ毛を
 銜へた態で、すら／＼と靡いて居る。

梅と柳の間を潜つて、酒井は其の竹垣について曲
 ると、處がら何となく羽織の背の婀娜めくのを、隣
 家の背戸の、低い石燈籠がト踞んだ形で差覗く。

主税は四邊を見て立つたのである。

先生が其の肩の聳えた、懐手のまゝ、片手で不精らしく丁々と枝折戸を叩くと、ばた／＼と跫音聞えて、縁の雨戸が細目に開いた。

と派手な友染の模様が透いて、眞圓な顔を出したが、燈なしでも、其の切下げた前髪の下、くるツとした目は届く。隔ては一重で、つい目の前の、丁子巴の紋を見ると、莞爾々と笑ひかけて、黙つて引込むと、又ばた／＼ばた。

程もあらず、何處かでねぢを壓したと見える、其の小座敷へ、電燈が颯と点くのを合圖に、中脊で瘦ぎすな、二十ばかりの細面、薄化粧して眉の鮮明な、口許の引緊つた藝妓島田が、故とらしい堅氣づくり。袷をしゃんと、前垂がけ、褌を取るの知らない風に、庭下駄を引掛けて、二ツ三ツ飛石を傳うて、カチリと外すと、戸を押してづゝと入る先生の背中を一ツ、黙言で、はたと打つた。是は、此の柏屋の姐さんの、小芳と云ふものゝ妹分で、綱次と聞えた流行妓である。

「大層な要害だな。」

「物騒ですもの。」

「些とは貯蓄つたか。」

と粗雑に廊下へ上る。先生に従うて、浮かぬ顔の主税と入違ひに、綱次は、あとの戸を閉めながら、

「お珍らしいこと。」

「……………」

「薦吉姉さんはお達者？」と小さな聲。

主税はヒヤリとして、ついに無い、ものをも言はず、恐れた顔をして、一寸睨んで、竊と上つて、開けた障子へ身體は入れたが、敷居際へ畏まる。

酒井先生、座敷の真中へぬいと突立つたまゝでー

其時茶がゝつた庭を、雨戸で消して入り来る綱次に、

「何うだ、色男が糺出したやうに見えるか。」

とづつと胸を張つて見せる。

「私には解りません、姉さんにお見せなさいまし、今に歸りますから、」

「然う目前が利かないから、お茶を挽くのよ。當節は女學生でも、今頃は内にや居ない。些と日比谷へでも出かけるが可い。」

「憚様、お座敷は宵の口だけですよ。」

と姿見の前から座蒲団をすりと引いて、床の間

の横へ直した。

「さあ、早瀬さん。」と、最う一枚。

主税は膝の傍へ置いたまゝ也。

友染の羽織を着たのが、店から火鉢を抱へて来て、
膝と一所に、お大事のものゝやうに据ゑると、先生
は引跨ぐ體に胡坐の膝へ挟んで、口の邊を一ツ撫
でゝ、

「敷きな、敷きな。」

と主税を見向いた。

「はい、」

とばかりで、其の目玉に射られるやうで堅く成つ
て何處も見ず、面を背けると端なく、重箆笥の前な
る姿見。此處で梳る柳の髪は長かるう、其の姿見の
丈が高い。

「お敷きなさいなね、貴下、此家へいらつしやりや、先生も何もありません、御遠慮をなさらなくつても可いんですよ。」

と意氣、文學士を呑む。此の女は、主税が整然として居るのを、氣の毒がるより、寧ろ自分の方が、為に窮屈を感じるので。

其の癖、先生には、却て、遠慮の無い様子で、肩を並べるやうにして支膝で坐りながら、火鉢の灰をならして、手で其の縁をスツと扱く。

「茶を一ツ、熱いのを。」

酒井は今のを聞かない振で、

「其から酒だ。」

綱次は入口の低い襖を振返つて、ト拝む風に、雪のやうな手を敲く。

「自分で起て。少いものが、不精を極めるな。厭ですよ。ちゃんと番をして居なくつては。姉

さんに言ひつかつて居るんだから。」
 と言ひながら、人懐かしげに莞爾して、

「ねえ、早瀬さん。」

「で、ございますかな。」と漸々膝去り出して、遠くから、背を圓くして伸上つて、腕を出して、巻蓑に火を点けたが、お蔭が物指を當てた襦袢の袖が見えたので、氣にして、慌てゝ、引込める。

「些と透かさないか、籠るやうだ。」

「縁側ですか。」

「うゝむ、」

と頭を掉つたので、すつと立つて、背後の肱掛窓を開けると、辛うじて、雨落だけの隙を残して、厳しい、忍返しのある、然も眞新しい黒板塀が見える。

「見霽しても御覧なさいよ。」

と主税を振向いて又笑ふ。

酒井が凝と、其の塀を視めて、

「一面の杉の立樹だ、森々としたものさ。」

と擦つて、獨で笑つた。

「しかし山焼の跡だと見えて、眞黒は酷いな。俺もゆく／＼は此家へ引取られやうと思つたが、裏が建つて、川が見えなくなつたから分別を變へたよ。」

其處へ友染がちら／＼来る。

「お出花を、早く、」

「はあ、」

「熱くするんだよ。」

「是、小兒ばかり使はないで、些と立つて食ふものゝ心配でもしろ。民は何うした、彼は可い。小老實に働くから。今に歸つたら是非酌をさせやう。

あの、愛嬌のある處で。」

「そんなに、若いのが好なら、御内のお嬢さんが可いんだわ。ねえ早瀬さん。」

是には早瀬も答へなかつたが、先生も苦笑した。

「妙も近頃は不可なつたよ。奥方と目配を爲合

つて、兎角銚子をこぎつて不可ん。第一酌をしない

ね。學校で、（お酌さん。）と云ふさうだ。小兒ど

もの癖に、相應に皮肉なことを云ふもんだ。」

「貴郎には小兒でも、最うお嫁入盛ぢやありません

んか。何うかすると、此方へもいらつしやる、學校

出の方にや、酒井さんの天女が、何のと云つちや、

あの、騒いでおいでなさるのがありますわ。」

「あの、嬰兒をか、何處の坊やだ。」

「あら、あんなことを云つて。此方の早瀬さんな

んかでも、丁ど似合ひの年紀頃ぢやありませんか。」

と何でもなう云つて退けたが、主税は懷中の三世

相とゝもに胸に支へて俯向いた。

「其の癖、當人は嫁人と云や鼠の繪だと思つて居るよ。」

と云ひかけて莞爾として、

「むゝ、是は、猫の前で危い話だ。」

と横顔へ煙を吹くと、

「引掻いてよ。」と手を擧げたが、思ひ出したやうに座を立つて、

「何うしたんだらうねえ、電話は、」と呟いて出やうとする。

「おい、阿婆は？」

「最う寐ました。」

「いや、老人は然う有りたい。」

座の白ける間は措かず、綱次はすぐに引返して、

「姉さんは、最う先方は出たさうですわ。」

云ふ間程なく、矢を射るやうな腕車一臺、から／

と門に着いたと思ふと、

「唯今！」と車夫の聲。

「然うかい。」

と・・・・意味のある優しい聲を、一寸誰かに懸けながら、一枚の襖音なく、すらりと開いて入つたのは、座敷歸りの小芳である。

瓜核顔の、鼻の準繩な、目の柔和い、心ばかり面
 蜜がして、黒髪の多いのも、世帯を知つたやうで奥
 床しい。眉の稍濃い、生際の可い、洗い髪を引詰め
 た総髪の銀杏返しに、すつきりと櫛の齒が通つて、
 柳に雨の艶の涼しさ。撫肩の衣紋つき、少し高目な
 お太鼓の帯の後姿が、恰も姿見に映つたれば、水の
 やうに透通る細長い月の中から抜出したやうで氣高
 いくらゐ。成程此の婦の母親なら、藝術家の阿婆で
 も、早寐を爲よう、と頷かれる。

「まあ、よくいらしつてねえ。」

と主税の方へ挨拶して、微笑みながら、濃い茶に
 鶴の羽小紋の紋着二枚袷、藍氣鼠の半襟、白茶地に
 翁格子の博多の丸帯、古代模様空色縮緬の長襦袢、
 慎ましやかに、酒井に引添ふた風采は、左支へなく

頭つむりが下さるが、分わけて其その夜よの首尾しゅびであるから、主税ちからは丁寧ていねいに手てを下さげて、

「御機嫌宜ごきげんよう、」と會釋あしやくをする。

其その時とき、先生撫然せんせいぶぜんとして、

「藝者げいしゃに挨拶あいさつをする奴やつがあるか。」

是これに一言句ひともんくあるべき處ところを、姉ねえさんは柔順おとなしいから、

「お出花いばなが冷つめたく成なつて、」

と酒井さかゐの香のみさしを取とつて、いそ／＼立たつて、開あけ

である肱掛窓ひしかけまどから、暗くらい雨落あまおちへ、ざぶりと覆かすと、

斜なめに見返みかへつて、

「大おほきな湯覆ゆこぼしだな、お前まへン許とこのは。」

「あんな事ことばかり云いつて、」

と、主税ちからを見みて莞爾にっこりして、白齒しらはを染そめても似合にあふ

年とし紀し、少すこしも浮ういた様子やうすは見みえぬ。

それから、小芳こよしは伏目ふしめに成なつて、二人ふたりの男をとこへ茶ちやを

注ついだが、此處こゝに居ゐれば其その役目やくめの、綱次つなじは車くるまが着つ

いた時とき、さあを歸かへりだ、と云いふとゝもに、はら／＼

座敷ざしきを出でたのと知しるべし。

酒井さかゐは輕かるく襟えりを扱しこいて、

「其處そこで、御馳走ごちさうは、」

「綱次さんが承知をします。」

「又寄鍋だらう、白瀧澤山と云ふ。」

「何ですか。」

と横目で見て、嬉しさうに笑を含む。

「いづれ不漁さ。」

と打棄るやうに云つたが、向直つて、

「早瀬、」と呼んだ聲が更まつた。

「えゝ。」

「先刻の三世相を見せる。」

一仔細なくてはならぬ様子があるので、ぎよつと

しながら、辭むべき数ではない。……柏家は

天井裏を掃除しても、こんなものは出まいと思はれ

る、薄汚れたのを、電燈の下に、先生の手にもぢ

／＼と奉る。

引取つて、ぐいと開けた、氣が入つて膝を立てた、

顔の色が厳しくなつた。と見て膽を冷したのは主税

で、小芳は何の氣も着かないから、晴々しい面色で、

覗込んで、

「心當りでも出来たんですか。」

不答。煙草の喫さしを灰の中へ邪険に突込み、

「何は、何うした。」

と唐突に聞かれたので、小芳は恍惚したやうに、
酒井の顔を視めると……

「彼よ、一寸意氣な、清元の旨い、景氣の可い、
いひ／＼本を引返して、」

「扱帯で、鏡に向つた處は、繪のやうだと云ふ評
判の……」

と凝と見られて、小芳は引入られたやうに、

「薦吉さん。」

と云つて、喫ひかけた煙管を忘れる。

主税は天窓から悚然とした。

「彼は何うした。」

「え、」

「俺は薩張山手に成つて容子を知らんが、相變ら

ず繁昌か。」

小芳は我知らず、（あゝ、何しよう。）と云ふ瞳が、主税の方へ流るゝのを、無理に堪へて、酒井を瞻つた顔が震へて、

「薦吉さんは最う落籍ましたさうです。」

と言はせも果てずに、

「（さうです。）は可怪い。近所に居ながら、知らん奴があるか、判然謂へ、落籍たのか！」

「はい、」と伏目になつたトタンに、優しげな睫毛が、（何うかなさいよ。）と、主税の顔へ目配せする。

酒井は、主税を見向きもしないで、悠々とした調子になり、

「そりや可い事をした、泥水稼業を留めたのは芽出度い。で、何處に居る、當時は」

よ？」

「私はよく存じませんのであの、何處か深川に居るんですつて。」

「深川？ 深川と云ふ人に落籍されたのか、川向ふの深川かい。」

「何うだよ、おい、知らない奴があるか。お前、仲が好くつて、姉妹のやうだと云つたぢやないか。姉妹分が落籍たのに、其の行先が分らない、べら棒があるもんかい。」

姉さんとか、小芳さんとか云つて、先方でも落籍祝ひに、赤飯ぐらゐ配つたらう、お前食つたらう、其奴を。

蒸立だとか、好い色だとか云つて、喜んでよ、此方からも、二の切手の五十銭ぐらゐ祝つたらう。小遣帳に記いてゐるだらう。其の婦の行先が知れない奴があるものか。

知らなきや馬鹿だ。尤も、己のやうな素一步と腐合はうと云ふ料簡方だから、はじめから惻憐でないのは知れてゐるんだ。馬鹿は構はん、何うせ、藝者だ、世間竝ぢやない。藝者の馬鹿は構はんが、薄情は不
可んな！薄情は。薄情な奴は俺ら眞平だ。」

「何時、私が、薄情な、
と口惜しく屹となる處を、酒井の劍幕が烈いので、
悄れて聲が霑んだのである。」

「薄情でない！薄情さ。懇意な婦の、居處を知ら

なけりや薄情ぢやないか。」

「だつて、貴郎。だつて、先方でも、つい音信をしないもんですから、」

「先方が音信をしなくつても、お前の薄情は帳消は出来ん。何故此方から尋ねんのだ。こんな稼業だから、暇が無い。行通はしないで、居處が分からんぢや、近火は何うする！火事見舞に町内の頭も遣らん、そんな仲よしがあるものか、薄情だよ、水臭いよ。」

姉さんの震へるのを見て、身から出た主税は堪り豫て、

「先生、」

と呼んだが、心ばかりで、此の聲は口へは出なかつた。

酒井は耳にも掛けないで、

「濟まん事さ、俺も他人でないお前を、薄情者に爲たくないから、居處を教へて遣らう。」

堀の内へでも参詣る時は道順だ。煎餅の袋でも持つて尋ねてやれ。おい、鳶吉は、當時飯田町五丁目
の早瀬主税の處に居るよ。」

眞蒼まっさをに成なつて、

「先生せんせい、」

「早瀬はやせ！」

と一聲ひとこゑ屹きつと成なつて、膝ひざを向むけると、疾風しつぷう一陣じん、黒くろ雲くもを捲まいて、三世相さんぜさうを飛とばし來きたつて、主税ちからの前まへへ礎はたと落おとした。

眼まなこの光射ひかりるが如ごとく、

「見みろ！ 野郎やらうは、素裕すあはせのすつとこ被かぶりよ。婦をんなは編あみ笠がさを着きて三味線さんみせんを持もつた、其その門附かどつけの繪ゑのある處ところが、お前まへたちの相性あひしやうだ。はじめから承知しょうちだらう。今更本いまさらほん郷がうくんだりの俺おれの繩張内なははりうちを胡亂うろついで、三世相さんぜさうの盜ぬす人つものぞ覗のぞきをするにや當あたるまい。

其その間ま抜けさ加減かげんだから、露店ほしみせの亭主ていしゆに馬鹿ばかにされるんだ。立派りっぱな土百姓どひやくしやうになりやあがつたな、田舎あな漢ものめ！」

主税は漸々、其も唾が乾くか、かすれた聲で、

「三世相を見て居りましたのは、何も、そんな、

そんな譯ぢやございませぬ……」とだけで後が續かぬ。

「翻譯でも頼まれたか、前世は牛だとか、午だとか。」「

と串戯のやうな警抜な詰問が出たので、聊か言が引立つて、

「否、實は其の何でございまして。其の、此間中から、お嬢さんの御縁談がはじまつて居ります、と

聞きましたもんですから、」

小芳は竊と酒井を見た。此の間でも初に聞いた、お妙の縁談と云ふのを珍らしさうに。

「は、あ、ぢや何か、妙と、河野英吉との相性を檢べたのかい。」

果せる哉、禮之進が運動で、先生は早や平家の公達を御存じ、と主税は、折柄も、我身も忘れて、

「はい、」と云つて、思はず先生の顔を見ると、
 瞼が颯と暗くなるまで、眉の根がじりりと寄つて、

「大きに、お世話だ。酒井俊藏と云ふ父親と、歴然とした、謹（夫人の名。）と云ふ母親が附いて居る妙の縁談を、門附風情が何を知つて、周章なさんな。

僭上だよ、無禮だよ、罰當り！

お前が、男世帯をして、いや、菜が不味いとか、女中が焼豆腐ばかり食はせるとか愚痴つた、と云つて、可いか、此の間持つて行つた重詰なんざ、妙が獨活を切つて、奥さんが煮たんだ。お前達ア道具の無い内だから、勿體ない、一度先生が目を通して、綺麗に装つてあるのを、重箱のまゝ、賣婦とせり箸なんぞしやあがつて、辨松にや叶はないとか、何とか、薄生意氣な事を言つたらう。

よく、其の慈姑が咽喉に詰つて、頓死をしなかつたよ。

無禮千萬な、未だ其の上に、妙の縁談の邪魔をすると云ふは何事だ。」

と大喝した。

主税は思はず居直つて、

「邪魔を……私、私が、邪魔なんぞいたし

ますものでございますか。」

「邪魔をしない！邪魔をせんものが、縁談の事に付いて、坂田が己に紹介を頼んだ時、お前何故其を断つたんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何故断つた？」

「あんな、道學者、」

「道學者が何うした。結構さ。道學者はお前のやうな犬でない、畜生ぢやないよ。何か、お前は先方の河野一家の理想とか、主義とかに就いて、不服だ、不賛成だ、と云つたさうだ。不服も不賛成もあつたものか。人間並の事を云ふな。畜生の分際で、出過ぎた奴だ。」

第一、汝のやうな間違つた料簡で、先生の心が解るのかよ！お前は不賛成でも己は賛成だか、お前は不服でも己は心服だか——知れるかい。

何のかのと、故障を云つて、（御門生は、令嬢に思召しがあるのでごわりませう。）と坂田が齒を吸つて、合點んでいたが、何うだ。」

「えゝ！あの、痘痕が、」

と色をかへて戦いた。主税は而も點々と汗を流し

て、

「他の事とは違ひます、聞棄てになりません。私は、私、是は、改めて、坂田に談じなければなりません。」

「何だ、坂田に談じる？坂田に談じるまでもない。己が然う思つたら何うするんだ、先生が、然う思つたら何とするよ。」

「誰が、先生、そんな事。」

「否、内の玄關の書生も云つた、坂田が己の許へ来たと云ふと、お前の目の色が違ふさうだ。車夫も云つた、車夫の女房も云つたよ。（誰か妙の事を聞きに来たものはないか。）と云つて、お前、車屋でまで聞くんださうだな。恥しくは思はんか、大きな態をしゃあがつて、薄髯の生えた面を、何處まで曝して歩行しているんだ。」

と火鉢をぐい／＼と揺つて。

「彼方へ躰々、此方へ躰々、狐の憑いたやうに、俺の近所を、葛西街道にして、肥料桶の臭をさせるのは何處の奴だ。何か、聞きや、河野の方で、妙の身體に探捜を入れるのが、不都合だとか、不意氣だとか言ふさうだが、」

噫、禮之進が皆饒舌つた・・・

「意氣も不意氣も土百姓の知つた事かい。これ、河野はお前のやうな狐憑ぢやないのだけぞ。」

學位のある、立派な男が、大切な嫁を娶るのだ。

念を入れんで何うするものか。檢べるのは當前だ。

藝者を媽々にするんぢやない。

又己の方ぢや、探捜を入れて貰ひたいのよ。さあ、

何處でも非難をして見ろ、と裸體で見せて差支への

無いやうに、己と、謹とで育てたんだ。

何が可恐い？何が不平だ？何が苦しい？己は、渠等の檢べるのより、お前が其處等をまごつく方が何のくらゐ迷惑か來れんのだ。

假令ば、奴等に、身元檢べを爲れるのが迷惑とす
る、癩に障るとなりや、己が丁と心得てる。此の指

一本、妙の身體を秘した日にや、按摩の勢揃ほど道學者輩が杖を突張つて押寄せて、垣覗きを遣つたつて、黒子一點も見せやしない、誰だと思ふ、おい、己だ。」

と又屹と見て、

「何爲、泰然と落着拂つて、いや、其はお芽出度い、と云つて、頼まれた時、紹介をせん。癩に障る、野暮だ、と云ふ道學者に、ぐツと首根ツ子を壓へられて、（早瀬氏は是がために、些と手負猪でござりましてな。）なんて、齒をすゝらせるんだ。」

馬鹿野郎！俺ら弟子は幾干でもある、が小兒の内から手許に置いて、飴ン棒までねぶらせて、妙と同一内で育てたのは、汝ばかりだ。其の子分が、道學者に冷かされるやうな事を、何爲するよ。

（世間に在るやつでござります。飼犬に手を噛まれると申して。以來あの御門生には、令嬢お氣を着けなさらんと相成りませんで。）坂田が云つたを知つてるか。

馬鹿野郎、これ、

と迫つた調子に、慈愛が籠つて、
「然ほどの鈍的でも無かつたが、天罰よ。先生の

目を眩まして、賣婦なんぞ引摺込む罰が當つて、魔が魅したんだ。

嫁入前の大事な娘だ、そんな狐の憑いた口で、向後妙の名も言ふな。

生意氣に道學者に難癖なんぞ着けやあがつて、汝の面當にも、娘は河野英吉にたゝツ呉れるから然う思へ。

「貴郎、」

と小芳が顔を上げて、

「早瀬さんに、どんな仕損ひが、お有んなすつたか存じませんが、決して、お内や、お嬢さん

の……（と聲が曇つて、）お為悪かれ、と思つてなすつたんぢやござんすまいから、」

「何だ。為悪かれ、と思はん奴が、何故藝者を引

摺込んで、師匠に對して申譯のないやうな不埒を働く。第一お前も、」

稲妻が西へ飛んで、

「同類だ、共謀だ、同罪だよ。おい、藝者を何だと思つて居る。藪入に新橋を見た素丁稚のやうに難有いもんだと思つて居るのか。馬鹿だから、己が不便を掛けて置きや、増長して、酒井は藝者の情婦を

難有ありがたがつてると思おもふんだらう。高慢かうまんに口くちなんぞ突出つきだしやがつて、俯向うつむいておれ。」

はつと首垂うなだれたが、目めに涙なみだ一杯ばい。

「そんな、貴郎あなた、難有ありがたがつてるなんのツて、」

「難有ありがたくないものを、何故なぜ俺おれの大事だいじな弟子でしに蔦吉つたきちを取持とりもつたんだい！」

主税ちからは手てを支ついて摺すつて出でた。

「先せ、先生せんせい、姉ねえさんは、何なんにも御存ごぞんじゞやござい
ません、其それは、お目違めちがひでございまして、」

と大呼吸おほいきを胸むねで吐つくと、

「黙だまれ！生うまれてから、俺おいら、目違めちがひをしたのは、お

前達まへたち二人ふたりばかりだ。」

「お言葉を反しますやうでございますが、」

主税は小芳の自分に對する情が仇になりさうなので、あるにもあられず据身に成つて、

「誰が然う云ふことをお耳に入れましたか存じませんが、藝者が内に居りますなんてとんだ事でございます。矢張、あの坂田の奴が、怪しかりません事を。私は覺悟がございませぬ、彼奴に對しましては、と目の血走るまで意氣込んだが、後暗い身の明は、些とも立つのではなかつた。」

「覺悟がある、何の覺悟だ。己に申譯が無くつて、首を縊る覺悟か。」

「否、坂田の畜生、根もない事を、」

「馬鹿！」

と叱して、調子を弛めて、

「も休み休み言へ。失禮な、他人の壁訴訟を聞いて、根も無い事を疑ふやうな酒井だと思つて居るか。お前が其の盲目だから悪い事を働いて、一端己の目を盗んだ氣で洒亞々々として居るんだ。」

先刻何うした、牛込見附で何うしたよ。慌てやあ

がつて、言種もあらうに、（女中が寝ていますと失禮ですから。）と駈出した、彼は何の状だ。婆が高利貸をして居やしまい、主人の留守に十時前から寝込む奴が何處に在る。

又寝ていれば無禮だ、と誰が云つたい。これ、お前たちに掛けちや、己の目は暗でも光るよ。飯田町の子分の内には、玄關の揚板の下に、どんな生意氣な、婦の下駄が潜んでるか、鼻緒の色まで心得てるんだ。べらぼうめ、内證でする事は客の靴へ灸を据ゑるのさへ秘し了されないで、（恐るべき家庭でござります。）と道學者に言はれるやうな、薄つぺらな奴等が、先生の目を抜こうなぞと、天下を望むやうな叛逆を企てるな。

悪事を爲るならするやうに、最つと手際よく立派に遣れ。見事に己を間抜けにして見る。同じ叱言を云ふんでも、其の點だけは恐入つたと、鼻毛を算まして讃めてやるんだ。三下め、先生の目を盗んでも、お前なんぞのは、たか／＼駈出しの（タツシエン、デীব）だ。ー

是は、（攫徒）と云ふ事だ然うである。主税は折れるやうに手をハツと支いた。

「恐入つたか、何うだ。」

「ですが、全く、其の、そんな事は……」

「無い？」

「……」

「藝者は内に居ないと云ふのか。」

「はい。」

霹靂の如く、

「歸れ！」

小芳が思はず肩を窘める。

「早瀬さん、私、私ぢや、」

と聲が消えて、小芳は紋着の袖其のまゝ、眉も残

さず面を蔽ふ。

「いや、愛想の盡きた蛆蟲め、往生際の悪い丁稚だ。そんな、しみつたれた奴は盗賊だつて風上にも置きやしない、酒井の前は恐れ多いよ、歸れ！」

これ、姦通にも事情はある、親不孝でも理窟を云ふ。前座のやうな情實でもあつて、一旦内へ入れたものなら、猫の兒の始末をするにも、鯉節はつきものだ。談を付けて、手を切らして、綺麗に捌いて遣らうと思つて、お前の許へ行くつもりで、百と、二

二百は、懷中に心得て出て來たんだ。

此段に成つても、未だ、あゝ、心得違ひをいたしました。先生よしなに、とは言ひ得ないで、秘し隠しをする料簡ぢや、汝が家を野天にして、婦とさかつていたいのだらう。其で身が立つなら立つて見ろ。口惜しくば、おい、恚うやつて馴染の藝者を傍に置いて、弟子に劍突をくわせられる、己のやうな者に成つて出直して來い。

さあ、歸れ、歸れ、歸れ！汚はしい。歸らんか。此の座敷は己の座敷だ。己の座敷から追出すんだ。歸らんか、野郎、歸れと云ふに、其處を起たと蹴殺すぞ！

「彼、お謝罪をなさいまし。」と小芳が楯に、おろ／＼する。

主税は、碎けよ、と身を揉んで、

「小芳さん、お取無しを願ひます。」と熟と瞻めて色が變つた。

「奥さんに、奥さんに、お願ひなさいよ、」

四十三

「何を、奥さんに頼めたい、黙れ。謹が藝者の取
持なんぞ爲ると思ふか。先刻も云ふ通り、芳、お前
も同類だ、同類は同罪だよ。早瀬を叩出した後ぢや
己が追出る、お前とも是切だから、然う思へ。」

と言はるゝまゝに、忍び音が、聲に出て、肩の震
へが、袖を揺つた。小芳は幼いものゝ如く、あはれ
に頭を掉つて、厭々をするのであつた。

「姉さん、」

と思込んだ顔を擡げた、主税は睨を引擦つて、元
氣附いたやうな……調子ばかりで、一向取留
の無い様子、しどろに成つて、

「貴女は、貴女は御心配下さいませんやう

に……先生、」

と更めて、両手を支いて、息を切つて、

「申譯がございません。飛だ連累でお在んなさい
ます。何うぞ、姉さんには、そんな事をおつしやい
ません様に、私を御存分になさいまして。」

「存分にすれば蹴殺すばかりよ。」

と吐出すやうに云つて、はじめて、豊かに煙を吸

つた。

「ぢや恐入つたんだな。

内に蔦吉が居るんだな。

最う陳じないな。」

「心得違ひをいたしまして……何とも申し

やうがございません。」

と吻と息を吐いたと思ふと、聲が霑む。

最早罪に伏したので、今までは執成すことも出来

なかつた小芳が、此處ぞ、と見計つて、初心にも、

袂の先を爪さぐりながら、

「大目に見てお上なすつて下さいまし。蔦吉さん

も仇な氣ぢやありません。決して早瀬さんのお世帯

の不為になるやうな事はしませんですよ。一生懸命

だつたんですから。あんな派手な妓が落籍祝何處ろ

ぢやありません、貴郎、着換も無くしてまで、借金

の方をつけて、夜遁げをするやうにして落籍たんで

すもの。

堅氣に世帯が持てさへすれば、其の内には、世間

でも、商賣したのは忘れませうから、早瀬さんの御

身分に障るやうなこともござんすまい。最う此の節

ぢや、洗濯ものも出来るし、單衣ぐらゐ縫えますつて、此の間も夜晩く私に逢ひに来たんですがね。」

と婀娜な涙聲に成つて、

「羽織が無いから日中は出られない、と拗ねたやうに云ふのがねえ、どんなに嬉しさうだつたでせう。其に土地馴れないのに、臆病な妓ですから、早瀬さんが恚うやつて留守にして居なさいます、今頃は、どんなに心細がつて、戸に附着いて、土間に立つて、歸りを待つて居るか知れませんが、私あ其を思ふと……」

と空色の、瞼を染めて、淺く壓へた襦袢の袖口。月に露添ふ顔を見て、主税もはら／＼と落涙する。

「世迷言を言ふなよ。」

と膠もなく、虞氏が涙を斥けて、

「早瀬何だ、分れるか。」

「行處もございません、仕様が無いんでございまして、先生さへ、お見免し下さいませれば、私の外聞や、そんな事は。世間體なんぞ。」と半云つて唾が乾く。

「いや、不可ん、許しや爲ないよ。」

「然う仰有つて下さいませのも、世間を思つて下さいませからでございます。最う、私は、自分だけでは、決心をいたしましたして、世間には、随分一人前の腕を持つて居ながら、財産を當に婿養子になりましたり、汝が勝手に嫁にすると申して、人の娘の體格検査を望みましたり、」

と赫と成つて、此の時や、血の色が眉宇に浮んだ。

「女學校の教師をして、媒妁をいたしました

り……其よりか、拾人の無い、社會の遺失物を内へ入れます方が、同じ不都合でも、罪は淺かるうと存じまして。其も決して女房になんぞ、爲ますわけではございません。一生日蔭ものゝ下女同様に、たゞ内證で置いて遣りますだけのことでございますから。」

「血迷ふな。腕があつて婿養子になる、女學校で見合をする、そりや勝手だ、己の弟子ぢやないんだから、其のかはり藝者を内へ入れる奴も弟子ぢやないのだ、分らんか。」

四十四

折をりから食卓しょくたくを持つて現あらはれた、友染いうぜんの其その愛々あい／＼しいのは、座ざの恰あたかも吹荒ふきすきんだ風かぜの跡あとのやうな趣おもむきに對たいして、散ちり残のこつた歸花かへりばなの風情ふぜいに見みえた。輝か／＼く電燈でんとうの光ひかりさへ、こがらし 凧あひての對手そらや空つきひとに月つぎひと一つ、で光景くわつげいが凄すさまじい。

一言ひとことも物ものいわぬ三人にんの口くちは、一度ひとにバアと云いつて驚おどろかさうと、我わが爲ために、はた爾しかく閉とぎされて居ゐるやうに思おもつて、友染いうぜんは簪かんざしの花はなとゝもに、堅かたく成なつて膳ぜんを据すゑて、浮上うきあがるやうに立たてつて、小刻こきざみに襖ふすまの際きは。

川千鳥かはちどりが其處そこまで通かよつて、チリチリ、と音ねが留とまつた。杯洗はいせん、鉢肴はちさかななどを、ちよこ／＼運はこんで、小ぢこんまりと綺麗きれいに竝ならべる中うちも、姉ねえさんは、唯たゞ火鉢ひばちを些ちつとづらしたばかり、悄しをれて俯向うつむいて、成ならば直すぐに、頭つむりが打うつのを壓おさへたさうに、火箸ひばしに置おく手ての白々しろ／＼と、白しらけた容ようす子を、立際たちぎはに打傾うちかしいで、熟ちつと見みて出でやうとする時とき、

「食くふものは此これだけか。」

と酒井さかゐは笑ゑみを含ふくむだが、此際このさい、天窓あたまから鹽しほで食くふと、大口おほくちを開あけられたやうに感かんじたさうで、襖ふすまの

蔭で慄然と萎んで壁の暗さに消えて行く。

慌てゝ、あとを閉めないで行つたから、小芳が心付いて立とうとすると、する／＼と裾を捌いて、慌しげに來たのは綱次。

唯今の注進に、ソレと急いで、銅壺の爛を引抜いて、長火鉢の前を衝と立ち状に來た。

前垂掛けとはがらりと變つて、鐵お納戸地に、白の角通しの縮緬、かはり色の裳を拂つて、上下對の袷の襲、黒縹珍に金茶で菖蒲を織出した丸帶、緋綸子の長襦袢、冷く絡むだ雪の腕で、猶豫らふ色なく、持つて來た銚子を向けつゝ、

「お酌、」

冴えた音を入れると、鶯のほうと立つ、膳の上の陽炎に、電氣の光が和らいで、朧々と春に返る。

「未だ宵の口かい。」

「柏家だけではね。」と莞爾する。

「遠慮なく出懸けるが可い、しかし猥褻だな。」

「あら、何故？」

「十一時過ぎてからの座敷ぢやないか。」

「御免なさいよ、苦界だわ。ねえ、早瀬さん、さ

あ、めしあがれよ、ぐうと、

「否、最う、」

主税は猪口を視むるのみ。

「お察しなさいよ。」

と先生に又お酌をして、

「御鼻肩の民子ちゃん、大江山に捕まへられて
いますから、助出しに行くんだわ。渡邊の綱次なの

よ。」

「道理こそ、鎖帷子の扮装だ。」

「鍛のやうに、根が出過ぎてはしなくつて。姉さ

ん、

と髻に手を觸る。

「否、」

と云つて、言の内に、（そんな心配をおしでな

い。）の意味が籠る。綱次は、（安心）の體に、胸

を一寸軽く撫で、

「おいしいものが、直ぐにあとから、」

「綱次姉さん、又電話よ。」

と廊下から雛妓の聲。

「あい、あい、彼方でも御用とおつしやる。では、
直き行つて來ますから、貴下歸つちや、厭ですよ、

民ちやんを連れて来て、一所に又お汁粉をね。」

酒井は黙つて頷いた。

「早瀬さん、御緩り。」

と行く春や、主税は其さへ心細さうに見送つて、

先生の目から面を背ける。

酒井は、杯を、つゝと獻し、

「早瀬、近う寄れ、最つと、」

と進ませ、肩を聳かして屹と見て、

「さあ、一ツ遣ろう。何だ、別離の杯にするか。」

「・・・・・・・・」

「其とも婦を思切るか。芳、酌いで遣れ、おい、

何うだ、早瀬。これ、酌いでやれ、酌がないかよ。」

銚子を擧げて、猪口を取つて、二人は顔を合せた

のである。

四十五

爾時、眼光稲妻の如く左右を射て、

「何を愚圖々々して居るんだ。」

「私がお願ひでござんすから、」と小芳は胸の躍るのを、片手で密と壓へながら、

「兎も角も今夜の處は、早瀬さんを歸して上げて下さいまし。而して能く考へさして、更めてお返事をお聞きなすつて下さいましな、後生ですわ、貴郎。」

ねえ、早瀬さん、然うなさいよ。先生も、こんなに仰有るんですから、貴下もよく御分別をなさいまし、此處は私が身にかへてお預り申しますから。

よ………

と促がされても立ちかねる、主税は後を憂慮ふのである。

「蔦吉さんが、どんなに何したつて、私知らない顔をしていれば可かつたのですけれど、思ふ事は誰も同一だと、私、」

と襟に頤深く、迫つた呼吸の早口に、
「身につまされたもんだから、遂々こんな事にし

て丁つて、元はと云へば……」

「そんな、貴女が悪いなんて、そんな事があるもんですか。」

と酒井の前を庇ふ氣で、肩に力味を入れて云つたが、續いて言はうとする、

（貴女がお世話なさいませんでも……）の
以下は、怪しからず、と心着いて、ハツと又小さく
なつた。

「否、私が悪いんです。ですから、後で叱られま
すから、貴下、兎も角もお歸んなすつて……」

「成らん！此場に及んで分別も絲瓜もあるかい。
こんな馬鹿は、助けて返すと、婦を連れて駈落を爲
かねない。短兵急に首を壓へて叩つ斬つてしまふの
だ。」

早瀬。

と苛々した音調で、

「是非も無い。さあ、たとへ俺が無理でも構は
ん、無情でも差支へん、婦が怨んでも、泣いても可
い。憧れ死に死んでも可い。先生の命令だ、切れつ
了へ。」

俺おれを棄すてる歟、婦をんなを棄すてる歟。

む、此この他ほかに言も句んくはないのよ。」

（何うだ。）と頤あごで言いはせて、悠いふぜん然ぜんと天てん井ちやうを仰あふいで、
くるりと背せなを見みせて、ドンと食しょく卓たくに肱ひぢをついた。

「婦をんなを棄すてます。先せん生せい。」

と判はつ然きり云いつた。其そこ處こを、酌しやくをした小こ芳よしの手ての銚てうし子し
と、主ち税からの猪ちよく口くちと相あひ觸ふれて、カチリと鳴なつた。

「幾いく久ひさく、お杯さかづきを。」と、ぐつと飲のんで目めを塞ふさい
だのである。

物ものをも言いはず、背うしろむ向むきに成なつたまゝ、世しよ帶たい話わをす
るやうに、先せん生せいは小こ芳よしに向むかつて、

「其そ方ちの、其そ方ちの熱あつい方ほうを。――最もう一ひと杯つ、最もう
一ひとツ。」

と立たて續つけに、五いつツ六むつツ。ほツと酒さけが色いろに出でると、
懷かい中ちゆう物ものを懷ふへ、羽は織おりの紐ひもを引ひ懸かけて、づゝと立たつた。

「早はや瀬せは涙なみだを乾かわかしてから外そへ出でる。」

小こ芳よしはひたと、酒さか井あの肩かたに、前まへ髪がみの附つくばかり、
後うしに引ひ添そうて縋すがり状さまに、

「お歸かへんなさるの。」

「謹きんが病び氣きよ。」

と自分で雨戸を。

「其は不可ませんこと。」と縁側に、水際立つてはらりと取った、隅田の春の空色の褙。力なき小芳の足は、カラリと庭下駄に音を立てたが、枝折戸の未だ開かぬほど、主税は座をずらして、障子の陰に成つて、忙く巻蓑を吸うのであつた。

二時ばかり過ぎてから、主税が柏家の枝折戸を出たのは、やがて一時に近かつたらう。一爾時そのとき《は姉さんはじめ、綱次と最う一人の其の民子と云ふ、牡丹の花のやうな若いのも、一所に三人で路地の角まで。

「お互に辛抱するのよう。」と酒氣のある派手な聲で、主税を送つたのは綱次であつた。ト同時に渠は姉さんと、手を緊乎と取り合つた。

時に、寂りした横町の、唯ある軒燈籠の白い明と、板塀の黒い蔭とに挟つて、平くなつて居た、頬被をした傳坊が、一人、後先を二して、密と出て、五六歩行過ぎた、早瀬の背後へ、
．．．．．
抜足で急々。

「もし、」

「先刻ア何うも。よく助けて下すつたねえ。」
と頬かむりを取つた顔は・・・
つた、電車の中の、其の半纏着。
禮之進に捕ま

四十六

土曜日は正午まで、授業が済む——教室を出る娘たちで、照陽女學校は一齊に温室の花を緑の空に開いたやう、澁と麗な日を浴びた色香は、百合よりも芳しく、杜若よりも紫である。

年上の五年級が、最後に静々と出拂つて、最上はで忘れた花の一枝もない。四五人がちらほらと、式臺へ出懸る中に、妙子が居いた。

阿嬢は、就中活澁に、大形の紅入友染の袂の端を、藤色のハツ口から飄然と掉つて、何を急いだか飛下りるやうに、靴の尖を揃へて、トンと土間へ出た處へ、小使が一人ばた／＼と草履穿で急いで来て、

「あゝ酒井様。」

と云ふ。優等生で、此の容色であるから、寄宿舎へ出入りの諸商人も知らぬ者はないのに、別けて馴染の翁様ゆゑ、いづれ菖蒲と引き煩らはずに名を呼んだ。

「はい。」

と振向くと、小使は小腰を屈めて、

「教頭様が少し御用がござります。」

「私に、」

「一寸お出で下さりまし。」

「あら、何でせう、」

と友達も、吃驚したやうな顔で「すと、出口に」

人、駒下駄を揃へて一人、一人は日傘を開け掛けて、

其邊の辻まで一所に歸る、お定まりの道連が、齊し

く三方からお妙の顔を瞻つて黙つた。

此の段は、豫め教頭が心得さしたか、翁様が又、

其處等の口が姦いと察した氣転か。

「何か、お父様へ御託づけものがござりますで。」

「まあ、然う、」

と莞爾して、

「待つてゝ下さつて？」と三人へ、一度に黒目勝

なのを働して見せると、言合せた様に、二人まで、

胸を撫で下して、ホッと笑つた「お腹が空い

た」と云ふ事ださうである。

お妙はづん／＼小使について廊下を引返しながら、怒つたやうな顔をして、振向いて同じやうに胸の許を擦つて見せた。

「應接室でござりますわ。」

教員室の前を通ると、背後むきで、丁寧、風呂敷の皺を伸して、何か包みかけていたのは習字の教師。向ふに仰様に寝て、兩腕を空に、後脳を引搦むやうにして椅子にかゝつて居たのは、數學の先生で、看護婦のやうな服装で、ちやうど聲高に笑つた婦人は、言はずとも、體操の師匠である。

行きがりに目についた、お妙は直ぐに俯目に成つて、コト／＼聲音が早くなつた。階子段の裏を抜けると、次の次の、應接室の扉は、半開きに成つて、ペンキ塗の硝子戸入の、大書棚の前に、卓子に向つて二三種新聞は見えたが、それではなしに、背文字の金の燦爛たる、新しい洋書の中ほどを開けて読む、天窓の、照々光るのは、當女學校の教頭、倫理と英文學受持ちの學士、宮畑閑耕。同じ文學士河野英吉の親友で、待合では世話になり、學校では世話をす（蝦茶と緋縮緬の交換だ。）と主税が憤つた一人

である。

此の編の記者は、教頭氏、君に因つて、男性を形容するに、留南奇の薰馥郁としてと云ふ、創作的文字を爰に挟み得ることを感謝しよう。勿論、其の香の、二十世紀であるのは言ふまでもない。

お妙は、扉に半身を隠して留まる。小使は其のまゝ向ふへ行過ぎる。

閑耕は、キラリ目金を向けて、じろりと見ると、目を細うして、髯の尖をピンと立てた、頤が圓い。

「此方へ、」
と鷹揚に云つて、再び濟まして書見に及ぶ。

お妙は扉に附着いたなりで、入口を左へ立つて、本の包みを抱いたまゝ、しとやかに會釋をしたが、敢て其よりは進まなかつた。

「此方へ。」と無造作なやうに、今度は書見のまゝ聲をかけたが、落着かれず、又ひよいと目を上げると、其の發奮で目金が躍る。

頬へ兩手をびつたり、慌てゝ目金の柄を、鼻筋へ揉込むと、睫毛を壓へ込んで、驚いて、指の尖を

潜くゞらして、まぶた瞼をこす擦つて、

「は、は、は、は、」と無む意い味みな笑わら方ひかたをしたが、向む直きなほ

つて真ま面じめ目めな顔かほで、
「何どですな。」

四十七

最^もう傍^{そば}へ來^きさうなものと、閑^{かん}耕^{かう}教^{かう}頭^{とう}が再^{ふた}び、じろりと見^みると、お妙^{たへ}は身^み動^{どう}きもしないで、熟^{じつ}と立^たつて、臆^{らふ}たけた眉^{まゆ}が、雲^{くも}の生^は際^{きは}に浮^ういて見^みえるやうに俯^{うつむ}向^むいて居^ゐるから、威^ゐ勢^{せい}に怖^おぢて、頭^{かしら}も得^え上^あげぬのであらう、いや、然^さもあらむ、と思^{おも}ふと・・・然^さうでない。酒^{さか}井^{あゐ}先^{せん}生^{せい}の令^{れい}嬢^{ぢやう}は、笑^{あは}れを含^{ふく}むで居^ゐるのである。

其^{それ}は、其^{それ}は愛^{あい}々^くしい、仇^{あど}氣^けない微^ほ笑^{あは}れであつたけれども、此^この時^{とき}の教^{かう}頭^{とう}には、素^す直^{なほ}に言^いふ事^{こと}を肯^きいて、御^{おん}前^{まへ}へ侍^{さむらい}はぬだけに、人^{ひと}の悪^{わる}い、與^{くみ}し易^{やす}からざるものがあるやうに思^{おも}はれた。で、苦^{にが}い顔^{かほ}をして、

「酒^{さか}井^{あゐ}さん、此^こ處^こへ來^きなくちや不可^いかんですよ。」
時^{とき}に教^{かう}頭^{とう}胸^{むね}を反^そらして、卓^{たい}子^{ぷる}をド^んと拳^{こぶし}で鳴^ならすと、妙^{たへ}子はつゝと勇^{いさ}ましく進^{すす}んで、差^さ向^{むか}ひに面^{おもて}を合^あはせて、其^そのふつくりした二^{ふた}重^か瞼^{はめ}を、臆^{おく}する色^{いろ}なく、

圓^{まる}く■つて、

「御^ご用^{よう}ですか。」

と云^いつた風^{ふう}采^{さい}、云^いひ知^しらぬ品^{ひん}威^ゐが籠^{こも}つて、閑^{かん}耕^{かう}は

思ひかけず、はつと照らされて俯向いた。

「教場でこそあれ、二人だけで口を利くのは、抑々生れて以来最初である。が、是は教場以外ではいかなる場合にても、恚うであらうも計られぬ。」

「はて、教頭ほどの者が、こんな譯ではない筈だが、と更めて疑の目を擧げると、脊もすらりとして椅子に居る我を仰ぐよ、酒井の嬢は依然として氣高いのである。」

「酒井さん……」
聲の出處が、倫理を講ずるやうには行かぬ。

咽喉が狂つて震へがあるので、えへん！と咳いて、手巾で擦つて、四邊を拭いたが、湯も水も有るのでない、其處で、

「小ウ使い、」と怒鳴つた。

「へーい、」

と謹んだ返事が響く。教頭は是に因つて、大に其の威嚴を恢復し得て、勢に乗じて、

「貴娘に聞く事があるのですが、」

「はい。」

「参謀本部の翻譯を爲て、未だ學校なども獨逸語

を持つて居ますな——早瀬主税——と云ふ、彼は、
貴娘の父様の弟子ですな。」

「えゝ、然う………」

「で、貴娘の御宅に置いて、修業をおさせなすつ
たさうだが、一體彼の幾歳ぐらゐの時からですか。」

「知りません。」

と素氣なく云つた。

「知らない？」

と妙な顔をして、額でお妙を見上げて、

「知らないですか。」

「えゝ、前にからですもの。内の人と同一ですか
ら、何時頃からだか分かりませんの。」

「貴娘は幾歳ぐらゐから、交際をしたですか。」

「………」

と黙つて教頭を見て、然も不思議さうに、

「交際つて、私、厭ねえ。早瀬さんは内の人なん

ですもの。」と打微笑む。

「内の人。」

「えゝ、」と猶豫はず頷いた。

「貴娘、然う云ふ事を言つては不可ますまい。彼
を（内の人）だなんと云ふと、御兩親をはじめ、貴

娘の名譽に關はるでせうが、あゝ、
と口を開いてニヤリとする。

お妙はツンとして横を向いた、眦に優しい怒が籠つたのである。

閑耕は、其背けた顔を覗込むやうにして、胸を曲げ、膝を叩きながら、鼻の尖に、へゝん、と笑つて、
「あんな者と、貴娘交際するなんて、藝者を細君にしていると云ふぢやありませんか。汚はしい。怪しからん不行跡です。實に學者の體面を汚すものです。然う云ふ者の許へ貴娘出入りをしてはなりません。知らない事はないのでせう。」
妙子は何にも言はなかつたが、はじめて眩しさうに瞬きした。

小使が来て、低頭して命を聞くと、教頭は頤で教へて、

「何を、茶をくれい。」

「へい。」

「其處を閉めて行け、寄宿生が覗くやうだ。」

扉が閉ると、教頭身構を崩して、仰向けに笑ひ懸けて、

「まあ、お掛なさい、其處へ。貴娘の爲にならんから、云ふのだよ。」

故々立つて突着けた、椅子の縁は、袂に觸れて、其の片袖を動かしたけれども、お妙は規則正しいお答禮をしたゞだけで、元の横向きに立つて居る。

「早瀬の事は未だ／＼、其處ろぢやないですが、と直ぐに又眉を顰めて、談じつけるやうな調子に變つて、

「酒井さん、早瀬は、ありや罪人だね、我々は其の名を口にするさへ憚るべき惡漢ですね。」

とのツそり手を伸ばして、卓子の上に散ばつた新聞を撫でながら、

「貴娘、今日のA・・・新聞を見んのですか。」

一言聞くと、颯と瞼を紅にして、お妙は友染の襦袢ぐるみ袂の端を堅く握つた。

「見ませんか、」

と問返した時、教頭は傲然として、卓子に頤杖を
支く。

「えゝ、」とばかりで、お妙は俯向いて、瞬きし
つゝ、流眊をするのであつた。

「別に、一大事に關して早瀬は父様の許へ、頃日
に参つた事はないですかね。或は何か貴娘、聞いた
事はありませんか。」

小さな聲だつたが判然と、

「否。」と云つて、袖に抱いた風呂敷包みの紫を、
皓齒で噛んだ。此の時、此の色は、瞼の其の朱を奪
うて、寂しく白く見えたのである。

「行かん筈はないでせうが、貴娘、知つていて、
未だ私の前に、秘すのぢやないかね。」

「存じませんの。」

と頭を掉つたが、いたいけに、拗ねたやうで、且
つくどいのを煩さう。

「ぢや、まあ、知らないと爲て。其から、お話す
るですがね。早瀬は、彼は、攫徒の手傳ひをする、
巾着切の片割のやうな男ですぞ！」

簪の花が凜として色が冴えたか氣が籠つて、屹と、

教頭を見向いたが、其の目の遣場が無さうに、向ふの壁に充滿の、偉なる全世界の地圖の、サハラ砂漠の有るあたりを、清い瞳がうる／＼する。

「勿論早瀬は、其が爲に、分けて規律の正しい、参謀本部の方は、此の新聞が出ない先に辭職、免官に、成つたです。是は其の擢徒に遭つた、當人の、御存じぢやらうね、坂田禮之進氏、あの方の耳に第一に入つたです。

で、見ないんなら御覽なさい。他の二三の新聞にも記いてあるですが。此のA・・・が一番悉しい。」

と落着いて向うへ開いて、三の面を指で教へて、

「此處にありますか、お読みなさい。」

「歸つて、私、内で聞きます。」と云つた、唇の花が戦いだ。

「は、は、は、貴娘、（内の人）だなんと云つたから、極りが悪いかね。何、知らないんなら宜しいです。私は貴娘の名誉を思つて、注意のために云ふんだから、能お聞きなさい。歸つて聞いたつて駄目さね。」

と太く侮つた語氣を帯びて、

「父様は、自分の門生だから、十に八九は秘すですもの。何で真相が解りますか。」

コツノ、廊下から剥啄をした者がある。と、教頭は、ぎろりと目金を光らしたが、反身に伸びて、

「カム、イン、」と猶豫はずに答へた。

此の剥啄と、カム、インは、餘りに呼吸が合過ぎて、恰も豫て言合せてあつたものゝやうである。

即ち扉を細目に、先づ七分立の寫眞の如く、顔から半身を突入れて中を覗いたのは河野英吉。白地に星模様の豎ネクタイ、金剛石の針留の光つたゞけでも、天窓から爪先まで、其日の扮装想ふべしで、髪から油が溶けさう。

早や得も言はれぬ悦喜の面で、

「やあ、」と聲を懸けると、入違ひに、後をドーン。

扉の響きは、ぶる／＼と、お妙の細い靴の尖に傳はつて、揺らめく胸に、地圖の大西洋の波が煽る。

四十九

「失敬、失敬。」

と些と持上げて、浮かせ氣味に物馴れた風で、河野は教頭と握手に及んで、

「やあ、失敬、」と云ひながら、お妙の背後から、横顔をじろりと見る。

河野の調子の發奮んだほど、教頭は冷やかな位に落着いた態度で、

「何處の歸りか。」

「大學（と力を入れて、）の圖書館に檢べものをして、其から精養軒で午飯を食うて來た。是から又

H エツチ 博士の許へ行かねばならん。」

と忙しさうに肩を掉つて、

「君（と故と低聲で呼んで、）此の方は・・・」

「生徒ー」と見下げたやうに云ふ。

「はあ、」

「ミス酒井と云ふ、」と横を向いて忍び笑を遣る。

「うむ、眞砂町の酒井氏の、」

と首を伸ばして、分つたやうな、分らぬやうな、

見知越のやうな、で、無いやうな、其の邊あやふや
なお妙の顔の見方をしたが、

「君、紹介して呉れ給へ。」

「學校で、紹介は可訝かるう。」

「だつて最う教場ぢやないぢやないか。」

「其では、」と眞に餘儀なさうに、さて、嚴格
に、

「酒井さん、過般も參觀に見えられた、是は文學
士河野英吉君。」

同じ文字を露した大形の名刺の芬と薰るのを、疾
く用意をして居たらしい、ひよいと抓んで、蚤いこ
と、お妙の袖摺れに出さうとするのを、拙い！と目
で留め、教頭は髯で制して、小鼻へ掛けて揉み上げ
揉み上げ揉んだりける。

英吉は眼を三つて、急いで其の名刺と共に、兩手
を衣兜へ突込んだが、斜めに腰を掉るよと見れば、
ちよこ／＼歩行きに、ぐるりと地圖を背負つて、お
妙の眞正面へ立つて、最一つ肩を揉んで、手の汗を、
ずぼんの横へ擦りつけて、清めた氣で、くの字形に
腕を出したは、短兵急に握手の積か、と見ると、揺

がぬ黒髪くろかみに自然おのづと四邊あたりを拂はられて、

「やあ、はゝはゝ、失敬しつげい。」

と英吉えいきち大照おほてれに成なつて、後うしざまに退しつて（おゝ、

神かみよ。）と云いひさうな態たいになり、

「お遊あそびにいらつしやい、妹いもうとたちが、學がく校かうは違ちがひ

ますが、皆みんな貴女あなたを知しつて居ゐるのですよ。はあ・・・

・・・

と獨ひとで頷うないて、大廻おほまはりに卓子タイプルの端はしを廻まはつて、どた

りと、腹はら這らんばいになるまでに、擴ひろげた新聞しんぶんの上うへへ乗のり懸か

つて、

「何を話はなして居ゐたのだい。」

教頭けうとうを一寸ちよいと見みれば、閑耕かんかうは額ひたひで睨ねめつけ、苦くき顔かほ

して、其その行過やりすぎを賤たしなめながら、

「實じつは、今いま、酒井さかゐさんに忠告ちゆうこくをして居ゐる處ところだ。」

お妙たへは色いろを又また染そめた。

「あゝ、早瀬はやせか。」

「然さうだとも！えゝ、酒井さかゐさん・・・」

黙だまつて居ゐるから、

「酒井さかゐさん！」

「はゝい、」と聲こゑがふるへて聞きえる。

「貴娘あなた知しらんのならお聞ききなさい。頃日このころの事ことです

が、今も云つた、坂田禮之進氏が、兩國行の電車で、百圓ばかり攫徒に拘られたです。取られたと思ふと、気が着いて、直に其奴を引摺へて、車掌とで引摺下ろしたまでは、恐入つて冷却していた其の攫徒がだね、忽ち烈火の如くに猛り出して、坂田氏をなぐつた騒ぎだ。」

「撲られたつてなあ、大人、氣の毒だつたよ。」

「災難とも。で、何です。巡査が来たけれども、何の証拠も擧らんもんで、其の場は其ツ切で、坂田氏は何の事はない、打たれ損の形だつたんだね。お聞きなさい——貴娘。」

証拠は無かつたが、怪むべき風體の奴だから、其の筋の係が、其奴を附廻して、同じ夜の午前二時頃に、淺草橋邊で、フトした星が附いて取抑へると、今度は袱紗に包んだ紙入ぐるみ、手も着けないで、坂田氏の盗られた金子を持つて居たんだ。

ねえ、貴娘。拘引して嚴重に檢べたんだね。何處へ其まで隠して置いたか。先刻は無かつた紙入を、と云ふ事になる……とです。」

あくまで慎重に教頭が云ふと、英吉が輕ニしく、
「妙だ、妙だよ。妙さなあ。」

「攫徒の名も新聞に出て居るがね、何とか小僧萬太と云ふんだ。其奴の白状した處では、電車の中で掏つた時、大不來しに打攫まつて、往生をしたんだが、對手が面を撲つたから、癩に障つて堪らないので、丁ど袖の下に俯向いて居た男の袖口から、早業で其の紙入をづらかし込んで、最う占めた、と其處で逆捻に捻ぢたと云ふんだね。

ところで、まん直しの仕事でもしたいものだ、柳橋邊を、晩く成つてから胡亂ついて居ると、うつかり出合つたのが、先刻、紙入れをにらかした男だから、金子は何う成つたらうと思つて、捕まつたら其迄だ、と惡度胸で當つて見ると、道理で袖が重いと云つて、はじめて、氣が着いて、袂を探して其の紙入を出してくれて、しかし、一旦此方の手へ渡つたもんだから、よく攫徒仲間が遣ると云ふ、小包みにももして、其筋へ出さなくつちや不可んぞ、と念を入れて渡してくれた。一所に交番へ來い！とも云はずに、すつきりした其人へ義理が有るから、手も附けないで突出すつもりで、一先づ木賃宿へ歸ろう

とする處を、御用に成りました。唯た一時でも善人
に成つて^なとした處だつたから掴まつたんで、盗人
心を持つた時なら、淺草橋の欄干を蹈んで、富貴竈
の屋根へ飛んでも、旦那方の手に合ふんぢやないと、
太平樂を竝べた。太い奴は太い奴として。

酒井さん。其の攫徒の、袖の下に成つて、坂田氏
の紙入を預つたと云ふ男は、誰だと思ひますか、ね
え、是が早瀬なんだ。」

と教頭は椅子をづらして、卓子く打つて、

「何うです、貴娘が聞いても一變へ

ん》だらうが。

其筋ぢや、直き其の關係者にも當りがついて、早
瀬も確か一二度警察へ呼ばれた筈だ。しかし其の申
立てが、攫徒の言に符合するし、早瀬も些とは人に
知られた、然るべき身分だし、何は措いても、名の
響いた貴娘の父様の門下だ、と云ふので、何の仔細
も無く濟むにや濟んだ。

眞砂町の御宅へも、此の事に附いて、刑事が出向
いたさうだが、そりや憚つて新聞にも書かず、御兩
親も貴娘には聞かせんだらう。

で、とんだ災難で、早瀬は参謀本部の譯官も辭した、と新聞には體裁よく出してあるが、考へて御覽なさい。

同じ電車に乗つて居て、坂田氏が掬られた事を其の騒ぎで知らん筈がない。知つていてだね、紙入が自分の袂に入つて居る事を……まあ、仮に攫徒に聞かれるまで氣がつかなんだにしてからがだ、愈々分つた時、面識の有る坂田氏へ返さうとはしないで、ですね、」

河野にも言を分けて、

「直接に攫徒に渡してやるも如何なもんだよ。何

よりもだね、そんな盜賊とひそ／＼話をして……

・公然とは出來んさ、いづれ密々話さ。」

誰も否とは云はんに、獨りで嵩にかゝつて、

「紙入を手から手へ譲渡を爲るなんて、そんな、

不都合な、後暗い。」

「だがね、」

と一寸々々、新聞を見るやうにしては、お妙の顔を伺ひ／＼、嬢があらぬ方を向いて、今は流眇もしなくなつたので、果は遠慮なく視めて居たのが、なえた様な聲を出して、

「坂田が疑ふやうに、攫徒の同類だと云ふ、そんな事は無いよ。君、」

「何うとも云へん。酒井氏の内に居たと云ふだけで、誰の子だか素性も知れないんだと云ふぢやないか。」

「父上に……聞いて……頂戴。」

とお妙は口惜しさうに、あはれや、うるみ聲して云つた。

二人密と目を合せて、苦々しげに教頭が、

「敢て然う云ふ探索をする必要は無いですがね、よしんば何事も措いて問はんとして、少くとも攫徒に同情したに違ひない、然うだらう。」

「そりやあの男の主義かも知れんよ。」

「主義、危険極まる主義だ。で、要するにです、酒井さん。あゝ云ふ者と交際をなさると云ふと、先づ貴嬢の名誉、續いては此の學校の名誉に係りますから、以來、口なんぞ利いては成りません。宜しいかね。危険だから近寄らんやうになさい、何をするか分らんから、あんな奴は。」

お妙は氣を張つめむと勤むる如く、熟と瞞る地圖

を^{まと}的^に、目^めを^み三^はつて、先^さ刻^{つき}からどんなに堪^こへたらう。
得^え忍^{しの}ばず^な涙^みぐむと、最^もうはら／＼と露^{つゆ}に成^なつて、紫^{むらさ}
の包^{つづみ}にこぼれた。あはれ主^ち税^{から}をして見^みせしめば、爲^た
に命^{いのち}も惜^{をし}むまじ。

いや、學士二人驚いた事。

「貴娘、何うしたんだ。」

と教頭が椅子から突立つた時は、お妙は始から確乎握つた袂を其のまゝ、白羽二重の肌襦袢の筒袖の肱を圓く、本の包に袖を重ねて、肩をせめて揉込むばかり顔を伏せて、聲は立てずに泣くのであつた。

「えゝ、何うして泣くです。」

靴音高く傍へ寄ると、河野も慌しく立つて来て、泣いちゃ不可ませんなあ、何も悲い事は無いですよ。」

「私は貴娘を叱つたんぢやない。」

「けれども、君の話振が些と穩でなかつたよ。だから誤解をされたんだ。貴娘泣く事はありません、と密と肩に手を掛けたが、お妙の振拂いもしなかつたのは、泣入つて、知らなかつた所爲であつたに……」

河野英吉嬉しさうな顔をして、

「さあ、機嫌を直してお話しなさい。」と云ふ時、きよと／＼目で、お妙の俯向いた玉の頸へ、横から

徐々／＼と頬を寄せて、リボンの花結びに一寸觸れて、
じた／＼と総身を戦かしたが、教頭は見えて見ぬ振の、
謂へらく、今夜の會計は河野持だ。

途端にお妙が身動をしたので、勿飛ばされたやう
に、がたりと退る。

「最う歸つても可いんですか。」

と顔を隠したまゝお妙が云つた。是には返す言も
あるまい。

「可いですとも！」

と教頭が言ひも果てぬに、身を捻つたなりで、禮
もしないで、つか／＼と出さうにすると、がた／＼
と靴を鳴らして、教頭は及腰に追つかけて、

「貴娘内へ歸つて、父様にこんな事を話しては不
可んですよ。貴娘の名譽を重んじて忠告をしたゞけ
ですから、ね、宜いですがね、ね。」

急いた聲で賺すが如く、顔を附着けて云ふのを聞
いて、お妙は立留まつて、おとなしく頷いたが、
（許す。）の態度で、然も優しかつた。

「あゝ。」と、安堵の溜息を一所にして、教頭は
室の眞中に、茫乎と突立つ。

河野の姿が、横ざまに飛んで、あたふた先へ立つて扉を開いて控へたのと、擦違ひに、お妙は衝と抜けて、顔に當てた袖を落した。

雨を帯びたる海棠に、廊下の埃は鎮まつて、正午過ぎの早や蔭になつたが、打向ひたる式臺の、戸外は麗な日なのである。

ト押重つて、木の實の生つた状に顔を竝べて、齊しくお妙を見送つた、四ツの髯の粘り加減は、蛞蝓の這うにこそ。

眞砂町の家へ歸ると、玄關には書生が居て、送迎ひの手数を掛けるから、何時も素通りにして、横の木戸をトンと押して、水口から庭へ廻つて、縁側へ飛上るのが例で。

さしむき今日あたりは、飛石を踏んだまゝ、母様御飯、と遣つて、何ですな、唯今も言はないで、と躡められさうな處。

然うではなかつた。

例の通りで、庭へ入ると、母様は風邪が長引いた

ので、最う大概は快いが、未だ些と寒氣がする肩つきで、寝着の上に、縞の羽織を羽織つて、珍らしい櫛巻で、面竄れがした上に、色が抜けるほど白く成つて、品の可いのが媚かしい。

寢床の上に端然と坐つて、膝へ搔卷の襟をかけて、其の日の新聞を読む――半面が柔かに蒲団に敷いて居る。

是を見ると、何うしたか、お妙は飛石に突据えられたやうに成つて、立留まつた。

美しい袂の影が、座敷へ通つて、母様は心着いて、遅かつたね。」

「え、お友達と作文の相談をして居たの。」

優しくも教頭の爲に、腹案があつたと見えて、淀みなく返事をしながら、何となく力なさうに、靴を脱ぎかける處へ、玄關から次の茶の間へ、急いで来た跽音で、襖の外から、書生の聲、

「お嬢さんですか、今日の新聞に、切抜きをなすつたのは。」

五十二

お茶漬ちやづけさら／＼、大好だいすきな鰯あじの新切しんぎれで御飯ごはんが濟すむと、
 硯すずりを一枚まい、房楊枝ふさやうじを持添もちそへて、袴はかまを取とつたばかり、
 くびれるほど固かたく巻まいた扱帯しごきに手拭てぬぐひを挟はさんで、金盥かなだらひ
 をがらん、と提さげて、黒塗くろぬりに萌葱もえぎの綿天めんてんの緒をの立た
 た、齒はの曲まがつた、女中ぢやうちうの臺所穿だいどころばきを、雪ゆきの素足すあしに突掛つゝか
 けたが、靴足袋くつたびを脱ぬいだまゝの裾短すそみじかなのを些ちつとも介意かま
 はず、水口みづぐちから木戸きどを出でて、日ひの光ひかりを浴あびた状さまは、
 踊舞臺をどりぶたいの潮汲しほくみに似にて非ひなりで、藤間ふぢまが新案しんあんの（羊ひつじ
 飼かひ。）と云いふ姿すがた。

お妙たへは玄關傍げんくわんわき、生垣いけがきの前の井戸いんどへ出でて、乾かわいては
 居ゐたが迂すべりのある井戸流いんどながしへ危氣あぶなげも無なく其その曲まがつた下げ
 駄たで乗のつた。女中ぢやうちうも居ゐるが、母様かあさんの躡しつげが可いいから、
 最もう十一二じふいちにの時分じぶんから膚はだについたものだけは、人手ひとて
 には掛かけさせないので、此處こゝへは馴染なじみで、水心みづしんがあ
 つて、つい去年きよねんあたりまで、土用中どやうちうは、遠慮えんりよなしに
 から／＼と汲くみ上げて、釣瓶つるべへ唇くちびるを押附おっつけるので、

井筒の紅梅は葉に成つても、時々花片が浮ぶのであつた。直に桃色の襷を出して、袂を投げて潜らした。惜氣の無い二の腕あたり、柳の架の散るよと見えて、井戸繩が走つたと思ふと、金盥へ入れた硯の上へ颯とかゝる、水が紫に、墨が散つた。

宿墨を洗ふ氣で、楊枝の房を、小指を刎ねて筆りはじめたが、何を焦れたか、ぐいと引斷るやうに邪險である。

ト構内の長屋の前へ、通勤に出る外、餘り着て來た事の無い、珍らしい背廣の扮装、何だか衣兜を膨らまして、其の上暑中でも持つたのを見懸けぬ、蝙蝠傘さへ携へて、早瀬が前後をニしながら、悄然として入つて來たが、梅の許なるお妙を見る……

「おゝ、」

と慌しい、懐しげな聲をかけて、

「お嬢さん。」

お妙は其まで氣がつかなくつた。呼れて、手を留て主税を見たが、水を汲んだ名残か、顔の色がほんのりと、物いわぬ目は、露や、玉や、凡そ聲なく言

なき世の其等の、美しいものより美しく、歌よりも心が籠つた。

「又、水いたずらをして居るんですね。」

と顔を視めて元氣らしく、呵々と笑ふと、柔い瞳が睨むやうに動き止まつて、

「金魚ぢやなくつてよ。硯を洗ふの。」

「あゝ、成程。」

と始めて金盥を覗込んで俯向いた時、人知れず目をしばたゝいたが、然あらぬ體で、

「御清書ですかい。」

「否、あの、繪なの。あの、上手な。明後日學校

へ持つて行くのを、是から描くんだわ。」

「御手本は何です、姉様の顔ですか。」

「嘘よ、そんなものぢや無いわ。あゝ、」

と莞爾して、獨りで頷いて、

「もつと可いもの、杜若に八橋よ。」

「から衣きつゝ馴れにし、と云ふんですね。」

と云ひかけて愁然たり。

お妙は何の氣もつかない、派手な面色して、

「まあ、何時覺えて、一寸、感心だわねえ。」

「可哀相に。」

と苦笑いをする、お妙は眞顔で、

「だつて、主税さん、先年私の誕生日に、お酒に

酔つて唄つたぢやありませんか。貴下は、淺くとも

清き流れの方よ。眞個の歌は柄に無いの。」

とつけ／＼云ふ。

「いや、恐入りましたよ。(ト一寸額に手を當

て、)先生は？」と更めて聞くと、心ありげに頷

いて、

「居てよ、二階に。」(おいでなさいな。)を色

で云つて、臆たく生垣から、二階を振仰ぐ。

主税は忽ち思ひついたやうに、

「お嬢さん、」と云ふや否や、蝙蝠傘を投出す如

く、井の柱へ押倒して、勢猛に、上衣を片腕から脱

ぎかけて、

「久しぶりで、私が洗つて差上げませう。」と、

脱いだ上衣を、井戸側へ突込むほど引掛けたと思ふ

と、お妙がものを云ふ間も無かつた。手を早や金盥

に突込んで、

「貴娘、其の房楊枝を。――淺くとも清き流れ

だ。

┌

「あら、亂暴ねえ。一寸、まだ釣瓶から雫がするのに、こんな處へ脱ぐんだもの。」

と躡めるやうに云つて、お妙は上衣を引取つて、露に白い小腕で、羽二重で結へたやうに、胸へ、薄色を抱いたのである。

「貴娘は、先生のやうに癩性で、寒の中も、井戸端へ持出して、ざあ／＼水を使うんだから、恚うやつて洗ふのにも心持は可いけれども、其の代り手を墨だらけにするんです。爪の間へ染みた日にや、一寸ぢや取れないんですからね。」

「厭ねえ、恩に被せて。誰も頼みはしないんだわ。」

「恩に被せるんぢやありません。爪紅と云つて、貴娘、紅をさしたやうな美しい手の先を臺なしになさるから、だから云ふんです。矢張私が居た時分のやうに、お玄關の書生さんにしてお貰ひなさいよ。」

あゝ、是は、

と片頬笑みして、

「餘り上等な墨ではありませんな。」

「可いわ！どうせ安いんだわ。最う私がするから可くつてよ。」

「手が墨だらけになりますと云ふのに。貴娘そんな邪険な事を云つて、私の手がお身代に立っている處ぢやありませんか。」

「それでもね、恚うやつてお召物を持つて居る手も、随分、随分（と力を入れて、微笑んで、）迷惑してよ。」

「相變らずだ。（と獨言のやうに云つて、）ですが、何うですね、近頃は、大層御勉強でございますね。」

「何うしてね？主税さん。」

「だつて、明日日お持ちなさろうと云ふ繪を、最う今日から御手廻しぢやありませんか。」

「翌日は日曜だもの、遊ばなくつちや、」

「あゝ日曜ですね。」

と雲を拂つた、硯は顔も映りさう。熟と見て振仰いで、

「其の、衣兜にあります、其の半紙を取つて下さい。」

「主税さん。」

「はあ、」

「ほゝほゝ、」とたゞ笑ふ。

「何が、可笑しいんです。え、顔に墨が刎ねまし

たか。」

「否、ほゝほゝ。」

「何ですてば、」

「あのね、」

「はあ。」

「もしかすると……」

「えゝ、えゝ。」

「ほゝゝ、翌日又日曜ね、貴郎の許へ遊びに行つ

てよ。」

水に映つた主税の色は、颯と薄墨の暗くなつた。

あはれ、仔細あつて、飯田町の家は最う無かつたの

である。

「入らつしやいましたも。」

と勢込んで、思入つた語氣で答へた。

「あの、庭の白百合は最う咲いたの、」

「……」

「此の間行つた時、未だ蒼が堅かつたから、早く

咲くやうに、おまじなひに、私、フツ／＼とふくら

まして来たけれど、

と云ふ口許こそふくらなりけれ。主税の背は、搾木にかけて細つたのである。

ト見て、お妙が言はうとする時、からりと開いた格子の音、玄關の書生がぬつと出た。心づけても言ふことを肯かぬ、羽織の紐を結ばずに長くさげて、

大跨に歩行いて来て、

「早瀬さん、先生が、」

二階の廊下は目の上の、先生は最う御存じ。

「は、唯今、」

と姿は見えぬ、二階へ返事をするやうにして、硯手に据ゑ、急いで立つと、上衣を開いて、背後へ廻つて、足駄穿いたが對丈に、肩を抱くやうに着せかける。

「やあ、是は、是は何うも。」

と骨も砕くる背に被いで、戦くばかり身を揉むと、
「意地が悪いわ、突張るんだもの。あら、憎らし
いわねえ。」

と身動きに眉を顰めて――長屋の窓からお饒舌りの
媽媽の顔が出て居るのも、路地口の野良猫が、の

つそり居ゐるのも、書しよ生せいが無む念ねんさうに其その羽は織おりの紐ひもをく
るノ、と廻まはすのも一いっ向かう氣きにもかけず、平へい氣きで
着きせて、襟えりを壓おさへて、爪つま立だつて、

「厭いやな、何どうして、こんなに雲ふ脂けが生できて？」

主税が大急ぎで、ト引挟まるやうに成つて、格子戸を潜つた時、手をぶらりと下げて見送つたお妙が無邪氣な忍笑。

「まあ、粗かしいこと。」

まことに硯を持つて入つて、其かはり蝙蝠傘と、其の柄に引掛けた中折帽を忘れた。

後へ立淀んで、此方を覗めた書生が、お妙の其の笑顔を見ると、崩れるほどにニヤリとしたが、例の羽織の紐を輪形に掉つて、格子を叩きながら、のそりと入つた。

誰も居なくなると、お妙は其の二重瞼をふつくりとするまで、最う、（其の速力を以てすれば。）主税が上つたらしい二階を見上げて、横歩行きに、井の柱へ手をかけて、伸上るやうにして居た。やがて、柱に背をつけて、くるりと向をかへて凭れると、學校から歸つたなりの袂を取つて、振をはらりと手許へ返して、睫毛の濃くなるまで熟と見て、袷と唐縮緬友染の長襦袢のかさなる袖を、ちゆう／＼たこか

いなと算ふへるばかりに、丁寧ていねいに引分ひきわけて、深いふかほど手首てくびを入れたは、内心ないしん人目ひとめを忍しのんだつもりであるが、此この所作しよさで餘計よけいに目めに着つく。

たゞし遣方やりかたが仇氣あどけないから、未だ覗のぞいて居ゐる件くだんの長屋窓ながやまとの女房かみさんの目めでは、おや／＼細螺きしやこか、鞠まりか、もし其堅豆それかたまめだ、と思おもつた、が、然さうで無ない。

引出ひきだしたのは、細長ほそながい小ちひさな紙かみで、字じのかいたもの、はて、怪けしからんが、心配しんぱいには及およばぬ——新聞しんぶんの切抜きりぬきであつた。

然さればこそ、學校がくかうの應接室おうせつしつでも、頻しきりに袂たもとを氣きにしたので、是これに、主税ちから——對坂田たいさかたの百有餘圖ひうよゑんを掏すつた・・・・・掏摸すりに關くわんした記事きじが、細こまかに一段だんばかり有あることは言いふまでもない。

お妙たへは、今朝けさ學校がくかうへ出掛でがけに、女中をんなが味噌汁おみおつけを装もつて來くる間あひだに、膳ぜんの傍そばへ轉ころんだやうになつて、例れいに因よつて三さんの面めんの早読はやよみと云いふのをする、(獨語學者どくごがくしやの掏摸すり。)と云いふ、幾分いくぶんか挑撥てうはつてき的てきの標語みだしで、主税ちからの其そのの事ことがででていたので、持もちかへて、見直みなほしたり、引張ひっぱつたり、畳たたんだり、太いたく氣きを揉もんだ様子やうすだつたが、ツンと怒おこつた顔かほをしたと思おもふと、お盆ぼんを差出さしだし

た女中と入違ひに、洋燈棚へついと起つて、剪刀を袖の下へ秘して来て、四邊を三して、づぶりと入れると、昔取つた千代紙なり、めつきり裁縫は上達なり、見事な手際でチヨキ／＼チヨキ。

母様は病氣を勤めて、二階へ先生を起しに行つて、貴郎、貴郎と云ふ折柄。書生は玄關どたんばたん。女中は丁ど、臺所の何かの湯氣に隠れたから、爾時は誰も知らなかつたが、知れずに濟みさうな事でもなし、又是だけを切取つても、主税の迷惑は隠されぬ、内へだつて、新聞は他に二三種も来るのだけども、そんな事は不關焉。で、教頭の説くを待たずして、お妙は一切を知つて居たので、話を聞いて驚くより、無念の涙が早かつたのである。

と書生は又、内々はがき便見たやうなものへ、投書をする道樂があつて、今日當り出さうな處と、床の中から手ぐすねを引いたが、寢坊だから、奥へ先繰になつたのを、あとで飛附いて見ると、恰も其裏へ、目的物が出る筈の、三の面が一小間切抜いてあ

るので、落膽したが、いや、此の悪戯、嬢的に極つたり、と怨恨骨髓に徹して、いつもより帰宅の遅いのを、玄關の障子から睨め透して待構へて、木戸を入つたのを追かけて詰問に及んだので、爾時のお妙の返事と云ふのが、あゝ、私よ。と濟したものだ。

其を又ひとりで此處で見直しつゝ、半ば過ぎると、目を外らして、多時思入つた風であつたが、ばさ／＼と引裂いて、くるりと丸めて八たと向ふ見ずに投り出すと、最一ツの柱の許に、其の蝙蝠傘に掛けてある、主税の中折帽へ留まつたので、
「憎らしい。」と顔を赤めて、匆ね飛ばして、帽子を取つて、袖で、ばた／＼と埃を拂つた。

書生が、すつ飛んで、格子を出て、何處へ急ぐのか、お妙の前を通りかけて、

「えへゝゝ。」

其の時お妙は、主税の蝙蝠傘を引抱へて、

「何處へ行くの。」

「車屋へ大急ぎでございます。」

「あら、父上はお出掛け。」

「否、^{いゝえ}車^{くるま}を^も持^もた^もせ^もて、アバ^{たいじん}大人^をを^よ呼^よび^よま^よす^よので、
は、は。」

はなむけ

五十五

媒灼人は宵の口、燈火を中に、酒井とさしむかひの坂田禮之進。

「唯今は御使で、特にお車をお遣はしで恐縮にござります。實はな、一寸私用で外出をいたし居りましたが、俗に彼の、蟲が知らせるとか申すやうな儀で、何か、心急ぎ、歸宅いたしますと、門口に車がござりまして、來客かと存じましたれば、いや、」と、額を撫で、笑ふの前に前齒が露出。

「は、は、は、即ち御持せのお車、早速間に合ひました。實は好都合と云つて宜しいので、是と申すも、偏に御縁のござりまする兆でござりまするな、は

あ、

酒井も珍らしく威儀を正して、

「お呼立て申して失禮ですが、家内が病氣で居ますんで、」と、手を伸して、巻蓑をぐつ、と抜く。

「時に、如何でござりまするな、御令室御病氣は。御勝れ遊ばさん事は、先達ての折も伺ひましてごわ

りましてな。河野でも承り及んで、英吉君の母なども大きにお案じ申して居ります。何う云ふ御容體でいらつしやりまするか、私も其の、甚だ心配を仕りまするので、はあ、

「別に心配なんぢやありません。肺病でも癩病でもないんですから。」

と先生警抜なことを云つて、俯向きさまに、灰を拂つたが、左手を袖口へ搔込んで胸を張つて煙を吸つた。禮之進は、畏つたズボンの膝を、張肱の両手で二つ叩いて、スーと云つたばかりで、斜めに酒井の顔を見込むと、

「たかノ、風邪のこじれです。」

「其の風邪が萬病の原ぢや、と誰でも申すことでござりますが、事實でな。何分御注意なさらんと成りません。」

と妙に白けた顔が、燈火に赤く見えて、

「では、然やうに御病中でござりましては、御縁女の事に就きまして、御令室と未だ御相談下さりませ間もござりませぬので？」

と重々しく素引きかけると、酒井は事も無げな口吻。

「いや、相談はしましたよ。」

「は、あ、御相談下さりましたか。其は、」と頷を揉んで、スーと云つて、

「御令室の思召は如何でござりませうか。實はな、恸やうな事は、打明けて申せば、貴下より御令室の御意向が主でござりまするで、其の御言葉一ツが、如何の極まりまする處で、推着がましゆうござりまするが、英吉君の母も、此の御返事・・・と申しまするより、寧ろ黄道吉日をば待ちまして、唯今以て、東京に逗留いたして居りまする次第で。はあ。御令室の御言葉一ツで、」

と、意氣込んで、スーと忙しく啜つて、

「何か、私までも、其を承りまするに就いて、此のな、胸が轟くでござりまするが、」

と熟と見据ゑると、酒井は半ば目を閉じながら、「他ならぬ先生の御口添ぢやあるし、伺つた通りで、河野さんの方も申分も無い御家です。實際、願つてもない良縁で、固より彼是異存のある筈はありませんが、但不束な娘ですから、」

「否、否、」

と頭を掉つて、大に發奮み、

「とんだ事でござります、怪しかりませんな、河野英吉夫人を、不束など、御意なされますると、親御の貴下のお口でも、坂田禮之進聞棄てに相成りません、はゝはゝ。で、御承諾下さりますかな。」

「家内は大喜びで是非とも願ひたいと言ひますよ。」

時に襖に密と當つた、柔な衣の氣勢があつた。其は次の座敷からで、先生の二階は、八畳と六畳二室で、其の八畳の方が書齋であるが、爰に坂田と相對したのは、壇から上口の六畳の方。

禮之進は又額に手を當て、

「いや、何とも。私大願成就仕りましたやうな心持で。お庇を持ちまして、痘痕が榮えるでござりまする。は、はゝ、」

道學先生が、自から其の醜を唱ふるは、例として話の纏まつた時に限るのであつた。

望^{のぞ}んでも得^え難^{がた}き良^{りやう}縁^{えん}で異^い存^{ぞん}なし、とあれば、此^{この}縁^{えん}談^{だん}は最^もう纏^{まと}つたものと、今^{いま}までの經^{けい}験^{けん}に因^よつて、道^{だう}學^{がく}者^{しや}は爾^しか心^{こころ}得^えるのに、酒^{さか}井^{あみ}が其^その氣^き骨^{こつ}稜^{りやう}々^々たる姿^{すがた}に似^にず、悠^い然^{ぜん}と構^{かま}へて、煙^{たばこ}草^の煙^{けむり}を長^{なが}々と續^{つづ}ける工^{くあ}合^ひが、何^どうも未^まだ話^{はなし}の切^き目^めでは無^なさうで、是^{これ}から一^{もつ}物^{ある}らしい、底^{そこ}の方^{ほう}の擲^{くすく}つたさに、禮^{れい}之^の進^{しん}は、日^ひ一日^{いち}歩^{ある}行^{まは}廻^{まは}る、ほとぼりの冷^さめやらぬ、靴^{くつ}足^た袋^びの裏^{うら}が何^{なん}となく生^{なま}熱^{あつ}い。

坐^{すわ}つた膝^{ひざ}をもぢノ、さして、

「え、御^ご令^{れい}室^{しつ}が御^ご快^{かい}諾^{だく}下^{くだ}されましたと成^なりますと、貴^{あなた}下の思^{おぼ}召^{めし}は。」

些^{ちつ}とも猶^た豫^めらわずに、

「私^{わたし}に言^{もん}句^くのあらう筈^{はず}はありません。」

「はあ、成^{なる}程^{ほど}、」と乗^{のり}かゝつたが、未^まだ荷^にが濟^すまぬ。是^{これ}で決^{けつ}着^{ちやく}しな ければ成^ならぬ譯^{わけ}だが・・・

「しますると、御^ご當^{たう}人^{にん}、妙^{たへ}子^こ様^{さま}でござりまする

が。

「娘^{むすめ}は小^こ兒^{ども}です。箸^{はし}を持^もつて、婿^{むこ}をはさんで、ア

ンとお開き、と嘯めて遣るやうな縁談ですから、否も應もあつたもんぢやありません。」
と小刻に灰を落したが、直ぐに又煙草にする。

道學先生、堪り豫て、手を握り、膝を揺つて、

「では、御兩親はじめ、御縁女にも、御得心下されましたれば、直ぐ結納と申すやうな御相談は如何なものでござりませうか。善は急げでござりまするで。」と講義の外の格言を提出した。

「先生、其處ですよ。」と灰吹に、づいと突込む。

「成程、就きまして、何か、別儀が。」

「大有り。(と調子が碎けて、)私どもは願う處の御縁であるし、妙にも彼是は申させません。無論ですね、お前、河野さんの嫁になるんだ。はい、と云ふに間違ひはありませんが、他に最う一人、貴下からお話し下すつて、承知をさせて頂きたいものがあるんです。何うでせう、其の者へ御相談下さるわけに参りませうか。」

「お易い事で。何でござりまするか、孰方ぞ、御親類でもおあんなさりますならば、直ぐに此の足で駈着けましても宜しう存じまするで。え、御

姓名、御住所は何とおつしやる？」

「住居は飯田町ですが、」

と云ふ時、先生の肩が稍聳えた。

「早瀬ですよ。」

「御門生。」と、吃驚する。

「掏摸一件の男です。」と意味ありげに打微笑む。

禮之進、苦り切つた顔色で、

「へい、其は又、何う云ふ次第でござりまする

か、唯御門生と承りましたが、何ぞ深しき理由でも

おありなさりますと云ふ……」

「理由も何にもありません。早瀬は妙に惚れてい

ます。」と濟まして云つた、酒井俊藏は世に聞えた

る文學士である。

道學者はアツと痘痕、目を圓かにして口をつぐむ。

「實の親より、當人より、ぞッこん惚れてる奴の

意向に従つた方が一番間違が無くて宜しい。早瀬

が此の縁談を結構だ、と申せば、直ぐに妙を差上げ

ますよ。面倒は入らん。先生が立處に手を曳いて、

河野へ連れてお出でなすつて構ひません。早瀬が不

可い、と云へば、斷然お斷りをするまでです。」

黙つてはいられない。

「しますると、其の、」

と少し顔の色も變へて、

「御門生は、妙子様に．．．．」と、あとは他人でも聊か言ひ豫て憚つたのを、．．．．酒井は平然として、

「惚れて居ますともさ。同一家に我儘を言合つて一所に育つて、其で惚れなければ何うかして居るんです。尤も其の惚方―愛―はですな、兄妹のやうか、従兄妹のやうか、其とも師弟のやうか、主従のやうか、小説のやうか、傳奇のやうか、其處は分りませんが、惚れて居るにや違ひないのでから、私は、親、伯父、叔母、諸親類、友達、失禮だが、御媒酌人、そんなものゝ口に聞いたり、意見に従つたりするよりは、一も二もない、早手廻しに、娘の縁談は、惚れてる男に任せるんです。如何でせう、先生、至極妙策ぢやありませんか。其ともまた酒飲みの料簡でせうか。」

と串戯のやうに云つて、一寸口切つたが、道學者の呆れて口が利けないのに、押被せて、

「薩張と然うして下さい。」

「貴下、えゝ、お言葉ではごわりまするが、スー」と類の窪むばかりに吸つて、禮之進、ねつ／

、．．．．．

「然やういたしますると、御門生早瀬子が令嬢を愛すると申して、萬一結婚をいたしたいと云ふやうな場合におきましては．．．．．でござります

る．．．．．其の邊は如何お計らいなされまする思召でござりまするな。」

「勝手にさせます。」と先生言下に答へた。

是に又少なからず怯かされて、

「しますると云ふと、貴下は自由結婚を御賛成

で。

「否、」

「はあ、如何様な御趣意に相成りまするか。」

「私は許嫁の方ですよ。」と酒井は笑ふ。

「許嫁？では、早瀬子と、令嬢とは、許嫁でお在

なされますので。」

「決してそんな事はありません。許嫁は、私と私の家内とです。で、二人とも其に賛成．．．．．で

すか。同意だつたから、夫婦になりましたよ。妙の方
方はどんな料簡だか、更らに私には分りません。早
瀬とくつゝいて、其が自由結婚なら、自由結婚、誰
かと駈落をすれば、其は駈落結婚、と濟ましたも
のである。

「へへ、御串戯で。御議論が些と矯激でござり
ませう！」

「先生、人の娘を、嫁に呉れい、と云ふ方が却つ
て矯激ですな、考へて見ると。けれども、習慣だか
ら些とも誰も怪まんのです。」

貴下から縁談の申込みがある。娘には、惚れてる
奴が居ますから、其の料簡次第で御話を取極める、
と云ふに、不思議はありますまい。唐突に嫁入らせ
ると、其のぞつこんであつた男が、いや、失望だわ、
懊惱だわ、煩悶だわ、辻つた、転んだ、と兎角世の
中が面倒臭くつて不可んです。」

「で、ござりまするが、此の縁談が破れますると、
早瀬子は其で宜しいとして、英吉君の方が、其こそ
同じやうに、失望、懊惱、煩悶いたしませう
で、……其の邊も御勘考下さりまするやう

に。

「大丈夫、」

と話は濟んだやうに莞爾して、

「昔から媒酌人附の縁談が纏まらなかつた為に、死ぬの、活きるの、と云つた例はありません。騒動の起るのは、媒酌人なしの内證の奴に極つたものです。」

「はあ、」

と云つて、道學者は口を開ひて、茫然として酒井の顔を見ていたが、

「しかし、貴下、聞く處に拠りますると、早瀬子は、何か、藝妓風情を、内へ入れておると申すでござりまするが。」

「然やう、藝妓を入れて居て、自分で不都合だと思つたら、妙には指もさしますまい。直ちに河野へ嫁入らせる事に同意をします。其とも内心、妙を何うかしたいと云ふなら、妙と夫婦になる前に、藝妓と二人で、世帯の稽古をして居るんでせう。孰方とも彼奴の返事をお聞き下さい。或は、自分、妙を欲しいではないが、他なら知らず河野へは嫁つちや不可ん、と云へば、私もお断だ。何の道、妙に惚れ

てる奴だから、其の眞實愛して居るものゝ云ふことは、娘に取つては、神佛の御託宣と同一です。」

形勢恁くの如くんば、掏摸の事など言ひ出したら、尚ほ此の上の事の破れ、と禮之進行詰つて眞赤になり、

「是非がごわりませぬ。兎も角、早瀬子を説きまして、更めて御承諾を願はうでござりまする。が、困りましたな。えゝ、先刻も飯田町の、あの早瀬子の居らるゝ路地を、私通りがゝりに覗きますると、何か、魚屋體のものが、指圖をいたして、荷物を片着け居りまする最中。何處へ引越される、と聞きましたら、（引越すんぢやない、夜遁げだい。）と怒鳴ります仕誼で、一向其の行先も分りませんが。」

先生哄然として、

「はゝはゝ、事實ですよ。掏摸の手傳ひをしたとかで、馬鹿野郎、東京には居られなく成つて、遁げたんです。最う此方へも暇乞に來ましたが、故郷の静岡へ引込む、と云つていましたから、河野さんの本宅と同郷でせう。御相談なさるには便宜かも知れません。……御隨意に、――お引取を。」

あゝ、媒酌人には何が成る。黄色い手巾を忘れて、
禮之進の歸るのを、自分で玄關へ送出して、引返し
て、二階へ上つた、酒井が次の其の八畳の書齋を開
けると、其處には、主税が、膳の前に手を支いて、
畏つて落涙しつゝ居たのである。夫人も傍に。

先生はつか／＼と上座に直つて、

「謹、酌をしてやれ。早瀬、今のはお前へ餞別

だ。
」

主税は心も闇だつたらう、覺束なげな足取で、階子壇をみし／＼と下りて来て、尤も、先生と夫人が居らるゝ、八畳の書齋から、一室越し袋の口を開いたやうな明は射すが、下は長六畳で、直ぐ其處が玄關の、書生の机も暗かつた。

さすがは酒井が注意して――早瀬へ臚、にする為だつた――道學者との談話を漏聞かせまいため、先んじて、今夜は其となく餘所へ出して置いたので。羽織の紐は、結んだか何うか、未だ歸らぬ。

酔つては居ないが、蹠跟と、壁へ手をつくばかりにして、壇を下り切ると、主税は眞暗な穴へ落ちた思がして、がつくりと成つて、諸膝を支こうとしたが、先生は兎も角、其處まで送り出さうとした夫人を、平に、と推着けるやうに辭退して来たものを、此處で躊躇して居る内に、座を立たれては恐多い、と心を引立てた腰を、自分で突飛ばす如く、大跨に出合頭。

颯と開いた襖とゝもに、唐縮緬友染の不斷帶、格

子の銘仙の羽織を着て、何時か、縁日で見たやうな、三ツ四ツ年紀の長けた姿。圓い透硝子の笠のかゝつた、背の高い竹臺の洋燈を、杖に支く形に持つて、母様の居室から、衝と立ちざまの容子であつた。

お妙の顔を一目見ると、主税は物をも言はないで、其のまゝ其處へ、膝を折つて、畳に突伏すが如く會釋をすると、お妙も、黙つて差置いた洋燈の臺擦れに、肩を細うして指の尖を揃へて坐る、袂が畳にさらりと敷く音。

こんな慇懃な挨拶をしたのは、二人とも二人には初めて。玄關の障子に殆ど裾の附着く處で、向ひ合つて、恚うして、さて別れるのである。

と主税が、胸を斜めにして、片手を膝へ上げた時、お妙のリボンは、何の色か、眞白な蝶のやう、燈火のうつらう影に、黒髪を離れてゆら／＼と揺めいた。

「最う歸るの？」

と先へ聲を懸けられて、纔に顔を上げてお妙を見たが、此の時の俤は、主税が世を終るまで、忘れまじきものであつた。

机に向つた横坐りに、稍亂れたか衣紋を氣にして、手で一寸々々搔合はせるのが、何やら薄寒さうで風采も沈んだのに、唇が眞黒だつたは、杜若を描く墨の、紫の雫を含むのであらう、艶に媚めかしく、且つ寂しく、翌日の朝は結ふ筈の後れ毛さへ、眉を掠めてはら／＼はらと、白き牡丹の花片に心の影のたゞずまえる。

「お嬢さん。」

「・・・・・・」

「御機嫌宜う。」

「貴下も。」と唯一言、無量の情が籠つたのである。

靴を穿いて格子を出るのを、お妙は洋燈を背にして、框の障子に掴まつて、熟と覗くやうに見送りながら、

「然やうなら。」

と勢よく云つたが、快く別れを告げたのではなく、学校の歸りに、何處かで朋達と別れる時のやうに、恚る折には恚う云ふものと、規則で口へ出たのらしい。

格子の外にちら／＼した、主税の姿が、まるで見えなく成つたと思ふと、お妙は拗ねた状に顔だけを障子で隠して、其のつかまつた縁を、する／＼二三度、烈しく掌で擦つたが、背を捻つて、切なさうに身を曲げて、遠い所のやうに、つい襖の彼方の茶の間を覗くと、長火鉢の傍の釣洋燈の下に、ものゝ本にも實際にも、約束通りの女中の有様。

一寸、風邪を引くよ、と先刻から、隣座敷の机に恠つかゝつて繪を描きながら、低聲で氣をつけた其の大揺れの船が、此の時、最早や見事な難船。

お妙は其の状を見定めると、何を穿いたか自分も知らずに、スツと格子を開けるが疾いか、身動きに端が解けた、しどけない扱帯の紅。

「厭よ、主税さん、地方へ行つては。」
 とお妙の手は、井戸端の梅に縋つたが、聲は早瀬
 をせき留める。

「・・・」

「厭だわ、私、地方へなんぞ行つて丁つては。」

主税は四邊を見たのであらう、闇の青葉に帽子が
 動いた。

「直き歸つて来るんですからね、心配しないで下

さいよ。」

「だつて、直だつて、一月や二月で歸つて来やし
 ないんでせう。」

「そりや、家を畳んで参るんですもの。二三年は
 引込みます積りです。」

「厭ねえ、二三年・・・月に一度ぐらゐは
 遊びに行つた日曜さへ、私、待遠しかつたんだもの。

そんな、二年だの、三年だの、厭だわ、私。」

お妙は格子戸を出るまでは、仔細らしく人目を忍
 んだやうだけれども、恚うなると敢て人聞きを憚る
 如き、低い聲ではなかつたのが、爰で急に密りして、

「あの、貴下、父様に叱られて、内證の……
奥さん、」

「えゝ！」

「其の方と別れたから、其で悲くなつて地方へ行つてしまふのぢやないの、えゝ、ぢやなくつて？」

「……」

「其ならねえ、辛抱なさいよ。母様が、其の方も
お可哀相だから、可い折に、父様に然う云つて、一
所にして上げるつて云つてるんですよ。私がね、
（お酌さん。）をして、澤山お酒を飲まして、然う
して、其時に頼めば可いのよ、父様が肯いてくれま
すよ。」

「……罰、罰の當つた事をおつしやる！私
は涙が溢れます、勿體ない。そりや最う、先生の御
意見で夢が覺ましたから、生れ代りましたやうに、
魂を入替へて、是から修行と思ひましたに、人は怨
みません。自分の越度だけれど、掏摸と、何うした
の、恚うしたの、と云ふ汚名を被ては、人中へは出
られません。」

先生は、彼是面倒だつたら、又玄關へ来て居れ、
置いて遣らう、とおつしやつて下さいますけれども、

先生のお手許に居ては、尚掏摸の名が世間に騒しくなるばかりです。

卑怯なやうですけど、其よりは當分地方へ引込んで、人の噂も七十五日と云ふのを、果敢ないながら、頼みにします方が、萬全の策だ、と思ひますから、私は、一日旅行してさへ、新橋、上野の停車場に着くと拝みたいほど嬉しくなります、そんな懐い東京ですが、しばらく分れねばなりません。」

「厭だわ、私、厭、行つちや。」

言が途絶えると、音がした、釣瓶の雫が落ちたのである。

差俯向くと、仄かにお妙の足が白い。

「静岡へ参つて落着いて、都合が出来ますと、どんな茅屋の軒へでも、其こそ花だけは綺麗に飾つて、歓迎をしますから、貴娘、暑中休暇には、海水浴にいらしつて下さい。」

江尻も興津も直き其處だし、未だ知りませんが、久能山だの、龍華寺だの、名所があつて、清見寺も、三保の松原も近いんですから、

富士の山と申す、天までとゞく山を御目にかけてま

するまで、主税は姫を賺して云つた。

「厭だわ、そんな事よりか、私、來年卒業すると、最うあんな學校や教頭なんか用は無いんだから、然うすると、主税さんの許へ、毎日朝から行つて、教頭なんかに見せつけてやるのにねえ。口惜しいわ、攫徒の仲間だの、巾着切の同類だのつて、貴郎の事を然う云ふのよ。而して、口を利いちゃ不可いつて、學校の名誉に障るつて云ふのよ。可うござんす、歸途に直ぐに、早瀬さんへ行つていッつけてやるつて、言おうかと思つたけれど、行狀點を減かれるから。然うすると、お友達に負るから、見つともないから、黙つて居たけれど、私、泣いたの。主税さん。卒業したら、其日から、（私も掏摸かい、見て頂戴。）と、貴下の二階に居て讐を取つてやりたかつたに、残念だわねえ。」

と擦寄つて、

「地方へ行かない工夫はないの？」

と忘れたやうに、肩に凭れて、胸へ縋つたお妙の手を、上へ頂くが如くに取つて、主税は思はず、唇を指環に接けた。

「忘れません。私は死んでも鬼に成つて。」

君きみの影かげ身にみ附つ添きそはん、と青あ葉をばをさら／＼と鳴ならし
たのである。

「おつと、此處、此處、飯田町の先生、此方だ、此方だ、はゝはゝ。」

十二時近い新橋停車場の、まばらな、陰気な構内も、冴返る高調子で、主税を呼懸けたのは、め組の惣助。

手荷物はすつかり、此のいさみが預つて、先へ来て待合はせたものと見える。大な支那革靴を横倒しにして、えいこらさと腰を懸けた。重荷に小附の折革靴、慾張つて挟んだ書物の、背のクオオスの文字が、伯林の、星の光は忸くぞとて、きら／＼異彩を放つのを、瓢箪式に膝に引着け、あの右角の、三等待合の入口を、叱られぬだけに塞いで、樹下石上の身の構へ、電燈の花見る面色、九分九厘に飲酒たり矣。

彼では、我慢が仕切れまい、眞砂町の井筒の許で、青葉落ち、枝裂けて、お嬢と分れて来る途中、何處

で飲んだか、主税も陶然たるもので、くわつと二等
待合室を、入口から帽子を突込んで覗く處を、め組
は渠の所謂（此方。）から呼んだので。是が一言で
ブーンと響くほど聞えたのであるから、其の大音や
思ふ可。

「やあ、待たせたなあ。」

主税も、恚うなると元氣なものなり。

ドツコイシヨ、と荷物は置棄てに立つて来て、

「待たせたぜ、先生、私あ九時から来ていた。」

「退屈したらう、氣の毒だつたい。」

「うんや、何。」

とニヤリとして、半纏の腹を開けると、腹掛へ斜

つかひに、正宗の四合罐、ト内證で見せて、

「是だ、譯やねえ、退屈をするもんか。時々喇叭

を極めちやあね、」

と向顛卷の首を掉つて、

「切符の賣下口を見物でさ。はゝは、別嬪さんの、

お前さん、手ばかりが、彼處で、眞白に恚うちらつ

く工合は、何の事あねえ、さしがねで蝶々を使うか、

活動寫眞の花火と云ふもんだ、見物だね。難有え。

はゝはゝ。」

「馬鹿だな、何だと思ふ、お役人だよ、怪しからん。」

と苦笑ひをして賤めながら、

「家はすつかり片附いたかい、大變だつたらう。」

「戦だ、宛然戦だね。だが、何だ、帳場の親方も

来りや、挽子も手傳つて、燈の點く前にや縁の下の

洋燈の破れまで掃出した。何を何うして可いんだか、

お前さん、皆な根こそぎ敲き賣れ、と云ふけれど、

然うは行かねえやね。蔦ちゃんが、手を突込んだ糠

味噌なんざ、打棄るのは惜いから、車屋の嬢々に遣

りさ。お佛壇は、蔦ちゃんが人手にや渡さねえ、と

云ふから、私は引背負つて、一度内へ歸つたがね、

何だつて、お前さん、女人禁制で、蔦ちゃんに、采

を掉せねえで、城を明渡すんだから、煩かしいや。

長火鉢の引出しから、紙にくるんだ、お前さん、仕

つけ絲の、抜屑を丹念に引丸めたのが出たのにや、

お源坊が泣出した。こんなに御新造さんが氣をつけ

て成すつたお世帯だのにつて、へん、遣つてやあが

ら。

えゝ、飲みましたとも。鐵砲卷は山に積むし、近

所の肴屋から、鯉はござつてら、鮪の活の可いやつを
目利して、一土手提げて来て、私が切味をお目に
かけたね。素敵な切味、一分だめしだ。転がすと、
一が出やうと云ふやつを親指でなめづりながら、酒
は鉢前で、焚火で、煮爛だ。

さあ、飲めつてえ、と、三人で遣りかけましたが、
景氣づいたから手明きの挽子どもを在りつたけ呼で
来た。薄暗い臺所を覗く奴あ、音羽から来る八八
屋だつて。此方へ上れ。豆腐イもお馴染だらう。彼
奴背負引け。やあ、酒屋の小僧か、き様喇叭節を唄
へ。面白え、と成つた處へ、近所の挨拶を済して、
歸つて来た、お源坊がお前さん、一枚着換へて、お
化粧をして居たらうぢやありませんか。蚤取眼で小
切を探して、さつさと出てゞも行く事か。御奉公の
おなごりに、皆さんお酌、と来たから、難有え、大
日如来、己が車に乗せてやる、いや、私が、と戦だ
ね。

戦と云やあ、音羽の八百屋は講釋の眞似を遣つた、
親方が浪花節だ。

あゝ、是がお世帯をお持ちなさいますお祝ひだつ
たら、とお源坊が涙ぐんだしほらしさに。お前さん、

有象無象が聲を納めて、しんみりとしたらうぢやね
えか。戦だね。泣くやら、はははははは、笑ふやら、
はははははは。

「其處でお前さん、何だつて、世帯をお仕舞えなさるんだか、金銭づくなら、此方等が無尽をしたつて、此家の御夫婦に夜遁げなんぞ爲せるんぢやねえ、と一番しみつたれた服装をして、銭の無さうな豆腐屋が言はあ。よくしたもんだね。」

「銭金づくなら、め組がついてる、と鐵砲卷の皿を眞中へ突出した、と思ひねえ。義理にや叶はねえ、御新造の方は、先生が子飼から世話に成つた、眞砂町さんと云ふ、大先生が不承知だ。聞きねえ。師匠と親は無理なものと思へ、とお祖母様が云つたとよ。無理でも通さにやならねえ處を、一々御尤なんだから、一言も無しに、御新造も身を退いたんだ。あんなにお睦じかつた、へへへ、」

「おい、可い加減にしないかい。」

「可いやね、お前さん、遠慮をするにや當らねえ、酒屋の御用も、挽子連も皆知つてらな。」

「なほ、悪いぜ。」

「まあ、忍けときねえな。其を、お前、大先生に叱られたつて、柔順に別れ話にした早瀬さんも感心

だらう。

だが、何だ、其で家を畳むんぢやねえ。若い掬摸が遣損なつて、人中で面を打たれながら、お助け、と瞬するから、其處ア男だ。諾來た、と頼まれて、紙入を隠してやつたのが暴露たんで、掬摸の同類だ、とか何とか云つて、旦那方の交際が面倒臭く成つたから、引拂つて駈落だよね。話は間違つたかも知れねえけれど、何だつてお前さん頼まれて退かねえ、と云やあ威勢が可いから、然う云つて、さあ、おい、皆、一番しゃん、と占める處だが、旦那が學者なんだから、萬歳、と遣れ。いよう旦那萬歳、と云ふと御新造萬歳、大先生萬歳で、次手にお源ちゃん萬歳――までは可かつたがね、へへ、かかり合だ、其の掬摸も祝つてやれ。可からう、

と乗氣に成つて、め組の惣助、停車場で手眞似が交つて、

「掬摸萬歳――と遣つたが、（すりばんだい。）と聞えませう。近火のやうだね。火事は何處だ、と木遣で騒いで、巾着切萬歳！と祝ひ直す處へ、八百屋と豆腐屋の荷の番をしながら、人だかりの中へ立つて見てござつた差配様が、お前さん、苦笑ひの顔

をひよつこり。これ／＼、火の用心だけは頼むよ、と云ふと、手廻しの可い事は、車屋のかみさんが、あとへ最う一度拂を掛けて、縁側を拭き直さう、と云ふ腹で、番手桶に水を汲んで控へて居て、何うぞ御安心下さいましツさ。

私は、お佛壇と、それから、蔦ちゃんか庭の百合の花を惜がつたから、荅を交せて五六本ぶらさげて、お源坊と、車屋の女房とで、縁の雨戸を操るのを見ながら、梅坊主の由良之助、と云ふ思入で、城を明渡して來ましたかね。

世の中にや、とんだ唐變木も在つたもんで、未だがらくたを片付けてる最中でさ、だん袋を穿きあがつた、

と云ひかけて、主税の扮装を、じろり。

「へへへ、今夜はお前さんも着つてるけれど。まあ、可いや。で何だ、痘痕の、お前さん、然も大面の奴が、ぬうと、あの路地を入つて來やあがつて、空いたか、空いたか、と云やあがる。それが先生、あいたかつた、と目に涙でも何でもねえ。家は空いたか、と云ふんです。近頃流行るけれど、ありや不賤だね。お前さん、人の引越の中へ飛込んで、値

なんか聞くのは。たとひ、何だ、二ツがけ大きな内へ越すんだつて、お飯粒を撒いてやつた、雀ツ子にだつて残懐は惜いや、蔦ちゃんなんか、馴染に成つて、酸漿を鳴らすと鳴く、流元の蛙は何うしたらうツて鬱ぐぢやねえか。」

「止せよ、そんな事。」
と主税は帽子の前を下げる。

「まあさ、そんな中へ来やあがつて、お刺に、空くのを待つて居た、と云ふ口吻で、其の上横柄だ。

誰の癩に障るのも同一だ、と見えて、可笑うがしたぜ。車屋の挽子がね、お前さん、え、え、えつつて、人の悪いツたら、聾の眞似をして、痘痕の極印を打つた、其奴の鼻頭へ横のめりに耳を突かけたと思ひねえ。奴もむか腹が立つた、と見えて、空いた家か、と喚いたから、私ア階子段の下に、蔦ちゃんが香を隠して置いたらしい白粉入を引出しながら、空家だい！と怒鳴つた。吃驚しやがつて、早瀬は、と聞くから、夜遁げをしたよ、と威かすと、へへへ

旦那、

め組は極めて小さい聲で、

「私ア高利貸だ、と思つたから……」

話を事にもこそよれ、
勿體ない、
道學の先生
を・・・高利貸。

些と黙つたか、と思ふと、め組はきよる／＼四邊を見ながら、歸天齋が扱ふやうに、敏捷く四合鑊から倒にがぶりと飲つて、呼吸も吐かず、

「それからね、人を馬鹿にしやあがつた、其の痘痕めい、差配は何處だと聞きやあがる。差配様が、差配様は此家の主人が駈落をしたから、後を追つかけて留守だ、と言つたら、苦つた顔色をしやがつて、家賃は幾干か知らんが、前前から、空いたら貸りたい、と思ふておつたんぢや、と云ふだらうぢやねえか。お前さん、我慢なるめえぢやねえかね。恚う、可い加減にしねえかい。柳橋の蔦吉さんが、情人と世帯を持った家だ、汝達の手に渡すもんか。め組の惣助と云ふ魚河岸の大問屋が、別荘にするつてよ、五百兩敷金が濟んでるんだ。歸れ、と喚くと、驚いて出て行つたつけ、はゝはゝ、何だね、氣に入つたらう、先生。」

「悪戯をするぢやないか。」

「だつて、お前さん、言種が言種な上に、圖體が氣に食はねえや。しらふの時だつたから、未だまあ

其で濟んだがね。掏摸萬歳の時で御覧じろ、えて吉、存命は覺束ねえ。」

と圖に乗つて饒舌るのを、おかしさうに聞惚れて、夜の潮の、充ち満ちた構内に潑標の如く千鳥脚を押据ゑて憚からぬ高話、人もなげな振舞ひ、小面憎かつたものであらう、夢中になつた渠等の傍で、駅員が一名、密と寄つて、中にもめ組の横腹の邊で唐突に、がんからん、がんからん、がんからん、

「ひやあ、」と据眼に呼吸を引いて、たぢノゝと退ると、駅員は冷々然として衝と去つて、入口へ向いて、がんからん。

主税も驚いて、

「切符だ、切符だ。」

と思はず口へ出して、慌てゝ行くのを、

「おつと、おつと、先生、切符なら心得てら。」

「最う買つといたか、其は豪い。」

惣助是には答へないで、

「えゝ、驚きたい、串戯ぢやねえ、二合半が處フイにした。さあ、まあ、お乗んなせえ。」

荷物にもつを引立ひつたてゝ來きて、二人ふたりで改札口かいさつぐちを出でた。其その半纏はんてんぎ着ぎと、薄色背廣うすいろせびろの押竝おしならんだ對照たいしやうは妙めうであつたが、乗客のりては唯此ただこの二人ふたりの影かげのちら／＼と分わかれて映うつるばかり、十四五人にんには過すぎないのであつた。

め組ぐみが、中なかほどから、急きふにあたふたと駈出かけだして、二等室とうじつを一ツ覗のぞき越こしに最も一つ出でて、ひよいと、飛とび込こむと、早はや主税ちからが近寄ちかよる時ときは、荷物にもつを入れて外そへ出でた。

「此處こゝが可いいや、先生せんせい。」

「何なんだ、青切符あききつぷか。」

「知しれた事ことだね、」

「大束おほたばを言いふな、駈落かけおちの身分みぶんぢやないか。幾干いくくらだつけ。」

と横よこへ反身そりみに衣兜かくしを探さぐると、め組ぐみはどんぶりを、ざつくと叩たたき、

「心得こころへてら。」

「お前まへに達引たてひかして堪たまるものか。」

「うゝむ、」と眞面目まじめで、頭かぶりを掉ふつて、

「不殘叩のこらずたき賣うつた道具だうぐのお錢あしが、づつしりあるんだ。お前めさんが、蔦つたちゃんに遣やれつて云いふのを、未ま

だ預つて居るんだから、遠慮はねえ、はゝはゝ、

「其ぢや遠慮しますまいよ。」

と乗込んだ時、他に二人。よくも見ないで、窓へ立つて、主税は乗出すやうにして妙なことを云つた。其は「一組の口から漏らした、河野の母親が以前、通じたと云ふ」馬丁貞造の事に就いてゝあつた。

「何分頼むよ。」

「むゝ、可いつて事に。」

主税は笑つて、

「其の事ぢやない、馬丁の居處さ。己も捜すが、

お前の方も。」

「……分つた。」

と後退つて、向ふさまに顛巻を占め直した。手
其のまゝ、花火の如く上へ開いて、

「いよ、萬歳！」

傍へ来た駅員に、突のめるやうに、お辭儀をして、
「眞平御免ねえ、はゝはゝ。」

主税は窓から立直る時、向ふの隅に、婀娜な櫛卷
の後姿を見た。ドンと硝子戸をおろしたトタンに、
斜めに振り返つたのはお蔦である。

はつと思ふと、お蔦は知らぬ顔をして、又くるり

と背^{うしろ}を向^むいた。
汽車^{きしや}出^いでぬ。

【前編・完】